寺福童遺跡4

小郡市文化財調査報告書　第221集

2007

小郡市教育委員会

寺福童遺跡4

—福岡県小郡市寺福童所在遺跡の調査—

小郡市文化財調査報告書　第221集

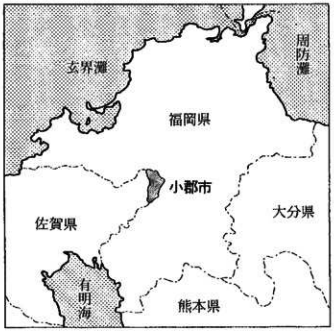
2007

小郡市教育委員会

寺福童遺跡4

—福岡県小郡市寺福童所在遺跡の調査—

小郡市文化財調査報告書　第221集



2007
小郡市教育委員会

巻頭図版　1

銅戈埋納遺構遺物検出状況　（南上方から）

巻頭図版　2

銅戈埋納遺構遺物検出状況　（北西から）

巻頭図版　3

銅戈埋納遺構遺物検出状況　（北東横から）

序

小郡市は、南北に西鉄大牟田線が縦断し、西にJR鹿児島本線と国道3号線、東西に大分自動車道が走る交通の要衝として、また福岡市のベットタウンとして、近年めざましい発展を遂げてきました。また、これらの開発に伴って市内の各所で遺跡が発見され、これまでに弥生時代から江戸時代にいたる様々な人間活動の痕跡が報告されてきました。考古学研究者のみならず、歴史研究者、郷土史家や考古学ファンのみなさまには、小郡市は『遺跡の宝庫』として広く知られつつあります。

今回ここに報告する寺福童遺跡４は、市営寺福童第３住宅の跡地を宅地化するにあたって発掘調査を行なっています。この遺跡からは古墳時代から江戸時代にかけての集落跡が発見されたほか、全国的にも珍しい弥生時代の青銅器埋納遺構が見つかり、マスコミ各社に報道されました。その概要については昨年『寺福童遺跡4　調査概報』を刊行しておりますが、このたびようやく正式な調査報告書を刊行するはこびとなりました。なお、青銅器埋納遺構については、平成19年度に詳細な調査成果について別途報告書を刊行する予定となっております。

遺跡の発掘調査とは、その多くが調査終了後の遺跡の破壊を前提としたものです。二度と見ることのできない遺跡から得られた数々の情報を、可能な限り後世に伝えるために各地で本書のような発掘調査報告書が作られています。本書もその一旦として、小郡市の、そして日本の歴史を伝える一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたっては地元寺福童区のみなさま、各地の自治体や研究機関、小郡市役所総務部財政課、都市建設部建設管理課にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

平成19年3月31日
小郡市教育委員会
教育長　清武　輝

例　言

1．本書は小郡市寺福童996・2に所在する埋蔵文化財包蔵地・寺福童遺跡地内で計画された、道路・水道整備事業に伴う発掘調査報告書である。

2．本遺跡内で発見された銅戈埋納遺構内部の詳細調査、出土銅戈等については、平成19年度に別途報告書を刊行する予定である。なお、本書に記載したこれらの概要については、平成17年度に刊行した発掘調査概報を基としている。

3．発掘現場での個別遺構写真は調査担当者が撮影し、遺跡全景写真の撮影は有限会社空中写真企画に委託した。

4．巻末写真図版の遺物写真及び銅戈埋納遺構のうち特に記した写真の撮影は有限会社文化財写真工房に委託した。

5．本報告書に掲載した遺構図面は個別図面については調査担当者が作成し、調査区全体図・地形測量図は株式会社埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託した。

6．本報告書に掲載した植物珪酸体分析・花粉分析については、株式会社古環境研究所に委託した。

7．出土遺物（銅戈を除く）の洗浄・復元には斉田美帆・山田和子の協力を得た。遺物実測は上田が、製図は吉田あや子が行った。

8．本書の執筆者は以下のとおりである。下記以外の執筆及び編集は上田が行った。

Ⅲ.（3）－（ⅳ）：山崎頼人・株式会社京都科学　　Ⅴ.（3）北口聡人

9．調査の実施にあたっては、小郡市役所総務部財政課・都市建設部建設管理課の協力を得たほか、以下の諸氏の来跡があり、多くのご指導、ご助言を賜った。記して感謝を申し上げたい。

[調査指導・協力]（敬称略、五十音順　所属は調査当時のもの）

＜現地調査＞　壹岐裕志　小田富士雄　佐田茂　田中正日子　西谷正（小郡市文化財専門委員会）　小池哲史　橋口達也　小田和利　大場孝夫（福岡県教育委員会）　岸本圭（北筑後教育事務所）　武末純一（福岡大学）　常松幹雄（福岡市教育委員会）　櫛宜田佳男（文化庁）　平田定幸　境靖紀　井上義也（春日市教育委員会）　馬田弘稔（九州歴史資料館）　松本岩雄（島根県教育委員会）　吉田広（愛媛大学）

＜地中探査＞　陸上自衛隊小郡駐屯地

＜保存科学分野＞　加藤和歳（福岡県教育委員会）　肥塚隆保　高妻洋成　降幡順子（独立行政法人奈良文化財研究所）　下川可容子（太宰府市教育委員会）　比佐陽一郎（福岡市教育委員会）

10．本調査に関わる出土遺物・レプリカ・写真・カラースライド等は小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管している。広く10活用されることを希望する。

凡　例

1．本書で用いた北は座標北を基準とし、図上の座標は国土座標に拠っている。

2．本書で用いた標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準としている。

3．本書での土色表記は農林水産技術会議事務局監修「新版　標準土色帳」1997年版」を用いて行なった。

4．本書の挿図においては下記の遺構略号を用いている。

竪穴住居：ＳＣ	**ピット：ＳＰ**
掘立柱建物：ＳＢ	**落し穴：ＳＪ**
土坑：ＳＫ	**土壙墓：ＳＲ**
溝状遺構：ＳＤ	**木棺墓：ＳＭ**
井戸状遺構：ＳＥ	**その他・不明遺構：ＳＸ**

5．本書の挿図について特に記載のないものは、個別遺構図は40分の1、出土遺物実測図は4分の1で作成している。

目　次

序
例言　凡例

Ⅰ．調査に至る経緯と経過 …… 1
（1）調査に至る経緯 …… 1
（2）調査の体制 …… 1
（3）調査の経過 …… 2

Ⅱ．位置と環境 …… 2

Ⅲ．調査の成果 …… 10
（1）調査の概要 …… 10
（2）遺構と遺物 …… 10
(ⅰ) 中～近世の遺構・遺物 …… 10
(ⅱ) 奈良・平安時代の遺構・遺物 …… 14
(ⅲ) 古墳時代の遺構・遺物 …… 17
(ⅳ) 弥生時代の遺構・遺物 …… 32
(ⅴ) その他の遺構・遺物 …… 33
（3）銅戈埋納遺構 …… 35
(ⅰ) 遺構の検出状況 …… 35
(ⅱ) 現地調査における見解 …… 35
(ⅲ) 現地調査における誤認と遺物取り上げ調査による成果概要 …… 38
(ⅳ) 銅戈埋納遺構レプリカ作成 …… 39
(ⅴ) 地震探査機による探査確認 …… 41
（4）調査成果のまとめ …… 43

Ⅳ．寺福童遺跡４における自然科学分析ー銅戈埋納遺構埋土の分析ー …… 45

Ⅴ．調査成果の検討 …… 53
（1）寺福童の遺跡分布から見た変遷 …… 53
（2）銅戈埋納遺構の特質ー他の埋納例との比較からー …… 62

巻末図版
抄録

挿図目次

第1図　小郡市地形図 ……3
第2図　調査区周辺遺跡分布図（S=1/25000）……4
第3図　調査区位置図（S=1/5000）……5
第4図　第1遺構面遺構配置図（S=1/200）……6・7
第5図　第2遺構面遺構配置図（S=1/200）……8・9
第6図　調査区壁面土層柱状模式図……10
第7図　7・8・9号土坑及び出土遺物 ……11
第8図　5・7・8・9号溝状遺構出土遺物……13
第9図　2・3・10・12・13号土坑及び井戸状遺構……15
第10図　10号溝状遺構・井戸状遺構・黒色包含層出土遺物 ……16
第11図　1・2号竪穴住居及び出土遺物……18
第12図　3・4・5号竪穴住居 ……20
第13図　3・4・5号竪穴住居出土遺物 ……21
第14図　6・7号竪穴住居及び出土遺物……23
第15図　8・9号竪穴住居……25
第16図　10号竪穴住居……26
第17図　8・9・10号竪穴住居出土遺物……27
第18図　1・4・5・11・14号土坑 ……28
第19図　5・11号土坑及び2・3・6号溝状遺構出土遺物…30
第20図　石蓋土壙墓及び木棺墓……31
第21図　落とし穴状遺構……33
第22図　その他の遺構出土遺物 ……34
第23図　銅戈埋納遺構図（調査地での状況、S=1/4）……37
第24図　探査反応箇所と実際の遺構分布状況（S=1/200）42
第25図　寺福童遺跡4　第2遺構面等高線図（S=1/300）44
第26図　銅戈埋納遺構内土壌の植物珪酸体分析結果 ……46
第27図　銅戈埋納遺構内土壌の花粉ダイアグラム……51
第28図　寺福童周辺遺跡分布（1）（S=1/2000）……55
第29図　寺福童周辺遺跡分布（2）（S=1/2000）……56
第30図　寺福童周辺遺跡分布（3）（S=1/2000）……57
第31図　寺福童周辺遺跡分布（4）（S=1/2000）……58
第32図　筑後国御原郡・御井郡条理地割 ……60
第33図　青銅器埋納遺構検出例（1）（S=1/20）……63
第34図　青銅器埋納遺構検出例（2）（S=1/20）……64

表目次

第1表　銅戈埋納遺構内土壌における植物珪酸体分析結果……46
第2表　銅戈埋納遺構内土壌の花粉分析結果……49
第3表　北部九州における不時発見埋納青銅器……65

写真図版目次

巻頭図版（1）銅戈埋納遺構遺物検出状況（南上方から）
巻頭図版（2）銅戈埋納遺構遺物検出状況（北西から）
巻頭図版（3）銅戈埋納遺構遺物検出状況（北東横から）
写真1　調査風景 ……2
写真2　現地説明会風景 ……2
写真3　銅戈埋納遺構①
（遺構確認段階、3号土坑内から）……35
写真4　銅戈埋納遺構②
（遺構確認段階、北西上方から）……35
写真5　埋納木箱想定状況（西から）……35
写真6　3号土坑との切り合い部分（北西横断面）……35
写真7　鈴筒による銅戈養生……39
写真8　内型（シリコン樹脂製）製作……39
写真9　外型（石膏）製作……40
写真10　脱型作業状況 ……40
写真11　彩色前の協議 ……40
写真12　地雷探査作業……41
写真13　試料採集箇所①（土層断面写真Ⅰ）……45
写真14　試料採集箇所②（土層断面写真Ⅱ）……45
写真15　銅戈埋納遺構内土壌の植物珪酸体顕微鏡写真…48
写真16　銅戈埋納遺構内土壌の花粉顕微鏡写真……50

巻末図版目次

図版1　寺福童遺跡4　全景（第2遺構面）
図版2　①　Ⅱ区第1遺構面　完掘状況
②　1号井戸状遺構　土層断面（西から）
③　2号土坑　土層断面（東から）
④　2号土坑　完掘状況（北から）
⑤　3号土坑　土層断面（南西から）
図版3　①　3号土坑　完掘状況（北東から）
②　13号土坑　完掘状況（東から）
③　1号竪穴住居　焼土塊断割断面
④　1号竪穴住居　貼床検出状況（北から）
⑤　1号竪穴住居　貼床掘削状況（西から）
⑥　2号竪穴住居　貼床検出状況（北西から）
⑦　6・9号竪穴住居　貼床検出状況（西から）
⑧　6・9号竪穴住居　貼床掘削状況（北東から）
図版4　①　7・8号竪穴住居　貼床検出状況（北東から）
②　7・8号竪穴住居　貼床掘削状況（北東から）
③　10号竪穴住居　貼床検出状況（南から）
④　10号竪穴住居　焼土検出状況（南東から）
⑤　10号竪穴住居　土器出土状況（南東から）
⑥　10号竪穴住居　貼床掘削状況（南から）
⑦　5号土坑　完掘状況（西上空から）
⑧　11号土坑　完掘状況（南東から）
図版5　①　1号溝状遺構　完掘状況（北から）
②　石蓋土壙墓　覆土断面（南西から）
③　石蓋土壙墓　検出状況（南西から）
④　石蓋土壙墓　土層断面（1）
⑤　石蓋土壙墓　土層断面（2）
⑥　石蓋土壙墓　墓壙完掘状況（西から）
⑦　木棺墓　土層断面（南東から）
⑧　木棺墓　整地層検出状況（北東から）
図版6　①　木棺墓　整地層断面（南東から）
②　木棺墓　墓壙完掘状況（北東から）
③　落とし穴状遺構　土層断面（西から）
④　落とし穴状遺構　完掘状況（北から）
⑤　落とし穴状遺構　断割断面（西から）
⑥　Ⅱ区黒色土（第1遺構面）堆積状況（1）
⑦　Ⅱ区黒色土（第1遺構面）堆積状況（2）
⑧　Ⅱ区黒色土（第1遺構面）堆積状況（3）
図版7　出土遺物（1）
図版8　出土遺物（2）

Ⅰ．調査に至る経緯と経過

（1）調査に至る経緯

寺福童遺跡４の調査は、「市営寺福童第3住宅」跡地の宅地化・分譲が決定し、これに伴って道路・水道の事前整備事業が計画されたため、平成16年3月12日付で小郡市役所総務部財政課より「埋蔵文化財の有無に関する照会（事前審査番号03130）」が提出されたことに始まる。これを受けて、小郡市教育委員会文化財課では同年3月24日に試掘調査を行い、古墳時代末の遺構・遺物を確認したことから「埋蔵文化財の存在を確認したため協議が必要」との旨を回答した。その後、両者と道路整備事業を担当する小郡市役所都市建設部建設管理課とで協議を行った結果、文化財課が市の単費事業として、平成16年度に埋蔵文化財発掘調査を実施することで同意を得た。

調査対象地は、分譲後の住宅建設に支障のないよう、道路・水道整備箇所だけでなく「市営寺福童第3住宅」跡地の全面とした。但し敷地南部については、試掘調査の結果からは遺構の存在が認められず、かつ過去の周辺における発掘調査の成果から上部を著しく削平されていることが明らかであったため、主に遺跡の存在する敷地北部906㎡については通常の発掘調査を実施し、残地分については必要性が認められた場合に調査範囲を拡張することとなった。

（2）調査の体制

本調査に関わる組織及び担当者は以下の通りである。

＜小郡市役所総務部財政課＞

部長	武田一敏
財政課長	佐々木美好
管財係係長	久光　誠
	白石和章

＜小郡市役所都市建設部建設管理課＞

部長	組坂弘幸
建設管理課長	木下末治（～H17.3.31）
	北原良信（H17.4.1～）
維持係係長	杉　哲哉
	田中　譲

＜小郡市教育委員会文化財課＞

教育長	秋山幸子（～H17.6.30）
	清武　輝（H17.7.1～）
教育部長	高木良郎（H17.4.1～7.31 課長兼任）
課長	小野太郎（～H17.3.31）
	田篭千代太（H17.8.1～）
係長	大石義行（～H18.3.31）
技師係長	片岡宏二（H18.4.1～ 文化財係長）
技師	上田　恵（調査・整理作業担当）
嘱託	北口聡人（調査担当、現天理市教育委員会）
技師	山崎頼人（埋納遺構切取作業担当）

＜調査参加者＞

井手怡三　牛島信雄　熊本啓子　古賀憲昭　近藤佳奈　重松栄子　高松ヨシエ　野田美根子
花田直枝　松本スマ子　森本智慧子　山本絹子　横田雅江（以上小郡市在住、五十音順）

（3）調査の経過

発掘調査は平成16年6月8日から11月17日まで実施し、銅戈を除く遺物及び図面等の整理作業は同年12月から平成19年3月31日まで行った。銅戈については、平成16年7月より調査と併行してレプリカ作成、仮補強のための化学処理、遺構切り取りと室内での遺物取り上げ及び埋納遺構内詳細調査を実施し、平成17・18年度に国庫補助事業として奈良文化財研究所と共同で保存処理を行っている。埋納遺構詳細調査・銅戈保存修理に関しては、平成19年度に別途報告書を刊行する予定である。以下調査日誌より抜粋した調査の経過を記す。

平成16年6月9日調査区西側重機による表層土除去開始　14日人力による遺構検出・掘削開始、古墳時代後期の集落域を確認　18日銅戈埋納遺構確認　22日課内職員全員で現地見学、埋納遺構のプラン等と今後の方針について検討　7月1日銅戈の総数を9口と確認　8日第1回小郡市文化財専門委員会開催（今後の調査方針、現地保存等についての検討）、奈良文化財研究所高妻洋成氏来跡、現地にて降雨に備えた銅戈の仮補強を実施　14～15日（株）京都科学により埋納遺構レプリカ作成のための型取り作業実施　21日調査区西側全景写真撮影　22日記者発表　24日現地説明会開催、200余名の見学者あり　26日調査区東側重機による表層土除去開始、銅戈埋納遺構の切り取り作業実施（～27日）、以後銅戈埋納遺構は埋文センター内にて遺物取り上げ及び遺構内詳細調査・保存修理作業に入る　8月3日東側人力による遺構検出・掘削開始（この頃から初秋まで頻繁に台風が上陸し、養生・水抜き等で調査に多大な影響が出る）　24日陸上自衛隊小郡駐屯地の協力を得て、地雷探知機を使用し東側の埋納遺構の有無を探査（～25日）　19日旧地形確認のため調査区南側にトレンチ掘削、地形測量実施　25日第2回小郡市文化財専門委員会開催（調査区東側の調査成果報告および銅戈取り上げに係る成果報告、今後の銅戈の保存処理・活用についての検討）　29日東側全景写真撮影、現場機材撤収　11月1日個別遺構図・遺構配置図の作成　8日重機による調査区埋め戻し作業開始（～16日）　17日調査完了、現地引渡し　12月～遺物・遺構図面の整理作業開始　平成18年2月20日発掘調査概報刊行

Ⅱ．位置と環境

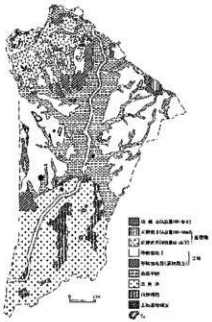
小郡市は筑後川支流である宝満川によって東西に二分される。東岸は筑前町・朝倉市との境界となる城山（花立山）を頂点として南へ台地が広がり、宝満川の沖積地を経て筑後平野へと連なる。西岸には背振山系から派生する丘陵（通称・三国丘陵）があり、これらが南へ行くに従って緩やかに下って平坦な台地へ移行する。さらに南では、東岸同様沖積地から平野部へと地形の変化を見せる。当遺跡の所在する寺福童は小郡市中央部、西岸の台地部分が舌状に張り出す低位段丘の南東裾に位置している。寺福童区は古来福童区と共に「福童原」と呼ばれ、南北朝時代末期に北朝の武将・今川了俊が九州の南朝勢力を制圧するきっかけとなった合戦の舞台として知られている。江戸時代になると「寺福童村」の名称が生まれるが、その由来は現在の集落域に所在した禅福寺という寺院であると考えら

写真１　調査風景

写真２　現地説明会風景

れている。今でも「ガランさん」と呼ばれる石造物や、「大門口」という地名など、寺院由来の痕跡が残る。

考古学の世界においては、昭和2年旧九州帝国大学医学部教授で後に九州考古学の創始者と謳われる中山平次郎博士によって「寺福童出土の甕棺」が紹介された、学史の上で非常に著名な地域である。この甕棺は、昭和14年に弥生土器の全国的な編年資料として「弥生式土器聚成図録」に収録され、北部九州における弥生時代後期の甕棺の代表例として広く研究者に知られることとなった。しかしこの甕棺が出土した遺跡の実態については長らく不明のままであり、平成9年以降寺福童区内において本格的な発掘調査が実施されるに至り、ようやく遺構・遺物を基にこの地域の歴史的様相が解明され始めたばかりである。これまで当遺跡の所在する寺福童地区で6回、西に近接する福童地区で7回の発掘調査がなされており、弥生時代から江戸時代にかけての遺構・遺物が確認されている。以下、今回の調査で検出された遺構と関連する遺跡を挙げながら、歴史的環境を概観する。



第1図　小郡市地形図

小郡市域における人間活動は旧石器～縄文時代に始まるが、この時期の遺跡・遺構は未だ確認されておらず、少量の石器・土器からその存在が伺い知れるのみである。

弥生時代に入ると集落の形成が活発になり、市域北部の三国丘陵と、甘木鉄道大板井駅～小郡駅にかけてを中心に広く展開する。本遺跡の所在する寺福童区では、寺福童遺跡5（7）で柳葉式磨製石鏃を伴う前期の木棺墓や、中期を主体とする甕棺墓群が検出されている（平成18年度報告書刊行）。また発掘調査は実施されていないが、寺福童地内を南北に縦断する県道小郡久留米線（現・市道中町寺福童208号線）工事の際にも多数の甕棺が確認されている。これらの墓域を形成した集団の集落は未確認のため、今後の周辺の調査に期待される。また東に接する大崎区内でも、大崎中ノ前遺跡（16）等の集落が出現し、以後古墳時代にかけて寺福童区内の集落群と連携した動きを見せる。

古墳時代初頭には、福童町遺跡1（15）を皮切りに集落が営まれる。同時期の墓域としては方形周溝墓4基が検出された寺福童遺跡1（12）が挙げられる。両者からは外来系の古式土師器が出土しており、小郡市域と畿内との関係を考える上で興味深い。古墳時代後期～末期にかけては、刀子や耳輪を伴う土壙墓とこれより若干時期を新しくする掘立柱建物が検出された寺福童内畑下道東遺跡（10）がある。

奈良時代には福童町遺跡2（13）、寺福童遺跡2（11）・3（8）で若干の遺物が確認されているが、集落の様相や規模を覗わせるほどの資料は確認されていない。

奈良時代末期から平安時代にかけての生活痕跡はこれまでの発掘調査では未確認だが、鎌倉時代に関しては福童山の上遺跡（6）で掘立柱建物1棟と溝の他、道路状遺構、土坑、井戸が検出され、龍泉系青磁や白磁等が出土している。

近世の遺構としては寺福童遺跡2で集落域の区画と思われる溝が検出されている他、佐賀県境に近い福童山の上遺跡においても機能こそ不明だがこの時期の溝が確認されている。福童東内畑遺跡（平成18年度報告書刊行）では近世の所産である井戸・土坑群・溝状遺構群が検出されており、17世紀代の陶磁器がまとまって出土している。以上のように、寺福童とその周辺では極めて限られた時期を除

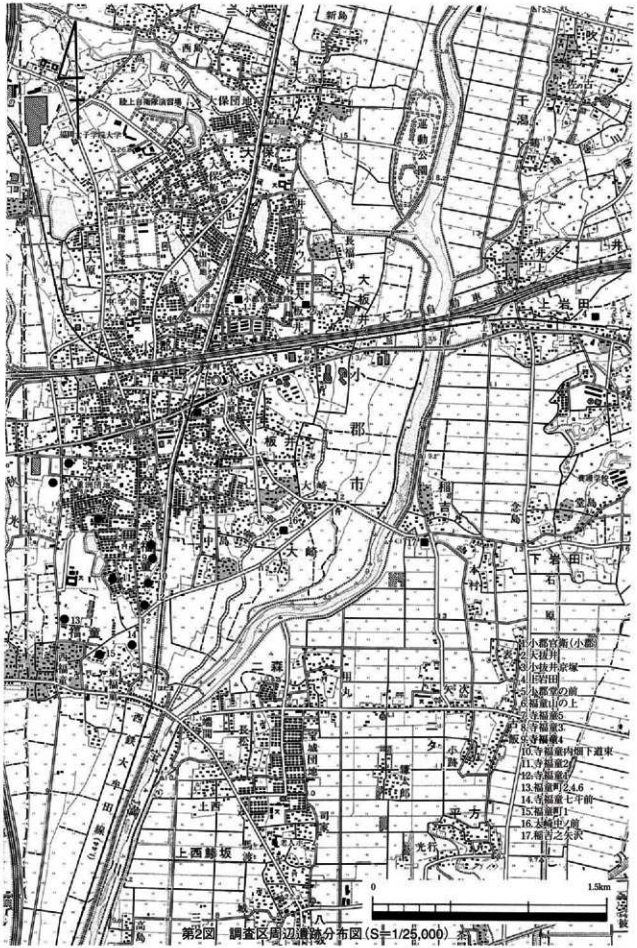
いて、連綿と人びとの生活が営まれていた。

当遺跡で検出された遺構のうち、特筆すべきなのは銅戈9本を伴う埋納遺構である。この遺構は中広型という型式から弥生時代中期の所産であることが判明している。小郡市とりわけ市域北部の三国丘陵は弥生時代の遺跡の密集地として著名であるが、その多くは前期後半から中期初頭を盛期とする。

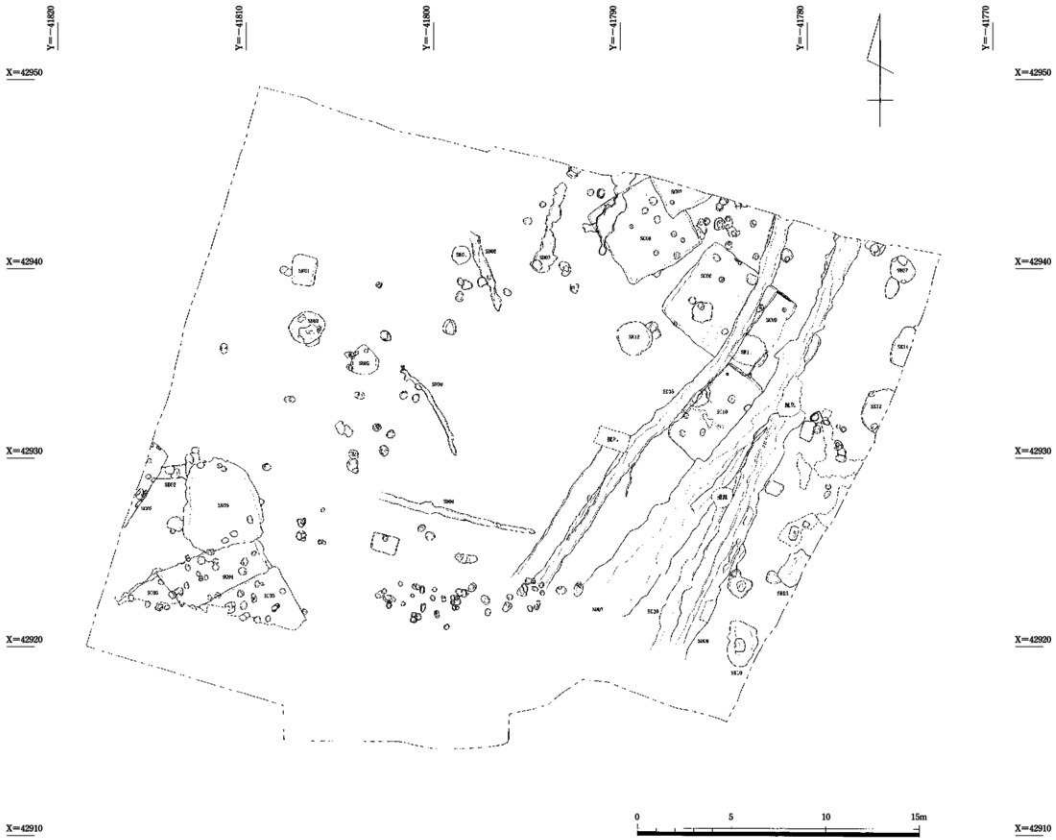
一方中期以降の集落・墓域は、現在の市域中心部である洪積台地上で大規模に展開しており、その代表例が小郡若山・小郡官衙（1）・大板井（2）の諸遺跡を包括する「小郡・大板井遺跡」である。小郡若山遺跡では中期前半の甕と多紐細文鏡2面を伴う埋納遺構が確認されており、大板井遺跡では1935（昭和10）年甘木鉄道敷設の際に中期の中細形銅戈7本が出土したとの記録が残っている。小郡・大板井遺跡を弥生時代・北筑後地域の拠点的集落とする説もあるが、それと同じように多数の青銅製祭器を持つ寺福童遺跡が当時どのように位置づけられていたのかは、今後の問題点となるだろう。

また今回当遺跡で検出されたような埋納遺構とは、その性格上多くが集落から隔絶された場所に造られるが、北九州市重留遺跡の竪穴住居内検出例等もあり、当時の生活の場と祭祀的性格を持つ場との関係は多様な姿を示す。寺福童の位置する台地上から東に臨む大崎地内には、大崎小園遺跡、大崎中ノ前遺跡といった弥生時代中期～後期の集落が分布しており、青銅器埋納遺構を有する寺福童遺跡との関連性については、今後の検討課題として様々な問題を残している。

第3図　調査区位置図（S＝1/5000）



第2図　調査区周辺遺跡分布図（S＝1/25,000）



第4図　第1遺構面遺構配置図（S＝1/200）

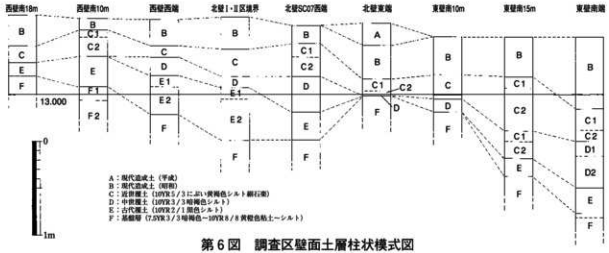
第5図　第2遺構面遺構配置図（S＝1/200）

Ⅲ．調査の成果

（1）調査の概要

本調査では調査範囲を東西2分割して作業を実施し、調査区と周辺の旧地形を確認するため南東部に地形測量用のトレンチを掘削した。以下、調査区西側をⅠ区、同東側をⅡ区、地形測量用トレンチをⅢ区と記す。遺構面は2面検出しており、上面（黒色土）を第１遺構面、下面（基盤層）を第２遺構面とした。第１遺構面で検出した遺構・遺物は古墳時代後期以降の所産、第２遺構面で検出した遺構・遺物はそれ以前の所産である。但し、Ⅰ区の表層土を除去した段階では遺構面が2面存在すると認識出来ずに「黒色遺物包含層」として掘削を行っており、出土遺物整理時に複数の遺構を消滅させていることが判明した。この点については調査の不備を深く恥じ入る次第である。調査区は低位段丘の南東裾部に相当するが、遺構検出面（第２・残存高）の標高は11.8～13.2ｍを測り、北から南へ、東から一旦くぼみをもって西へ高まりを見せる微地形が確認できた。

検出遺構には、竪穴住居跡10軒、土坑14基（SK06は欠番）、溝状遺構10条、井戸状遺構1基、落とし穴状遺構1基、石蓋土壙墓1基、木棺墓1基、その他ピット群がある。Ⅰ区では、後世の土坑に破壊されてはいるものの、調査時に弥生時代中期後半の中広形銅戈9本を伴う埋納遺構が確認されている。Ⅰ・Ⅱ区とも遺跡の主体となるのは古墳時代後期の集落及び中～近世の溝状遺構群である。



第６図　調査区壁面土層柱状模式図

（2）遺構と遺物

(i) 中～近世の遺構・遺物

土坑3基と溝状遺構5条が該当する。Ⅰ・Ⅱ区双方に分布し、北寄りのものは上部の削平が見られる。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む褐灰色土を主体とするものが多い。全体的に遺物の出土は少なく、日常生活圏からは離れた集落の末端地域であったと思われる。

SK07（第7図/図版1）

Ⅱ区北東隅に位置し、長軸1.5m・短軸1.3m・深さ0.4mを測る。平面プランは円形を呈する。この遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。上部は大幅な削平を受けていると思われるが、壁は直立し、底面に浅いピット状の痕跡を持つ。廃棄土坑か。

出土遺物（第7図/図版7）

下層を中心に少量の遺物が出土した。1は土師質の土鍋、内外面ともナデ調整を施し、残存部に煤の付着は認められない。2～4は滑石製の鍋。口縁端部から延びる断面長方形の耳を2箇所持ち、内面はナナメ、外面はタテに細かい単位で丁寧なケズリ調整を施す。2は耳の中ほどから下部にかけて煤

の付着が確認できる。底部の形状は不明だが、残存状況から復元すると体部よりやや薄手でくの字型に屈曲したものと思われる。

SK08（第7図/図版1）

Ⅱ区北寄り中央に位置し、長軸0.9m・短軸0.7m・深さ最大0.6mを測る。平面プランは不整形を呈する。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。壁は傾斜をもって立ち上がっており、埋土は人為的な埋め戻しがなされた様相を示す。廃棄土坑か。

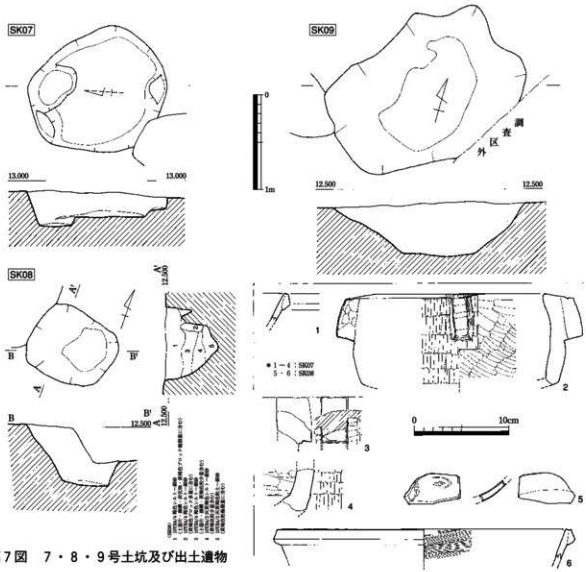
出土遺物（第7図/図版7）

微量の土器片が出土している。5は同安系青磁椀の体部。オリーブ灰色の釉を厚手に施し、内面にわずかに陰刻文が確認できる。6は土師質の土鍋。内面は丁寧なヨコハケ、外面は粗雑なヨコナデを施し、口縁端部を折り返してナデつけた突帯を持つ。

SK09（第7図/図版1）

Ⅱ区第1遺構面で検出した。南寄り東端に位置し、長軸2.1m・短軸1.4m・深さ0.6mを測る。平面プランは不整形を呈し、壁は傾斜をもって立ち上がる。埋土の状況からこの時期の遺構と判断した。

極少量の土器片が出土しているが、いずれも摩滅が激しく微細な土師器・須恵器片であり、埋め戻しの際に包含層から混入した遺物と考えられる。



第7図　7・8・9号土坑及び出土遺物

SD04（第4図/図版2）

Ⅱ区第1遺構面で検出した。東西方向に流れ、Ⅰ区への延長が認められるが、こちらでは表土掘削段階で削平している。幅0.5m・深さ0.15mを測り、断面はU字型を呈する。上部は後世の造成時に削平を受けている。埋土の状況からこの時期の遺構と判断した。近接して関連遺構は認められない。

微量の土器片が出土しているが、いずれも摩滅が激しい須恵器の細片であり、包含層からの混入遺物と考えられる。

SD05（第4図/図版1・2）

Ⅱ区第1・2遺構面で検出した、南北方向に流れる溝状遺構。SC06・09・10およびSK11を切る。北側は東へゆるやかに湾曲しており、西岸南側を中心に浅いテラスを持つ。幅1.0m・深さ0.3～0.5mを測り、断面はU字型を呈する。遺構底部のレベルは北から南への傾斜を示し、当時の地形を意識して構築されたと思われる。埋土は遺構各所によって異なり、全体にレンズ状の堆積を示したことから人為的な埋め戻しを行なったと考えられる。南側部分の方が若干であるが良好な残存状況にある。

出土遺物（第8図）

掘り込み面である黒色土からの混入品と遺構に伴う遺物が混在している。1～3は須恵器の供膳具類、いずれも二次的な摩滅が激しく、包含層からの混入品であろう。4は陶器の擂鉢、鉄釉を施した後4条1組の擂目を刻む。17世紀台の肥前製品。5は瓦質の擂鉢、内面に4条1組の擂目を施す。焼成はやや悪く、灰白色を呈する。6は越州系青磁椀の口縁部。明緑色釉が厚く施されている。これも破断面を含め、全体に摩滅が激しく中世の堆積層からの混入品であろう。

SD07（第4図/図版1・2）

Ⅱ区第1・2遺構面で検出した、南北方向に流れる溝状遺構。SC10を切り、SD08・09に切られる。幅1.5m・深さ0.3～0.6mを測り、断面はV字型を呈する。東岸を中心に部分的にテラスを持つ。遺構底面のレベルは北から南への傾斜を示し、地形を意識して構築されたと思われる。底面中央部には浅い溝状の痕跡が確認できた。埋土は遺構各所によって異なり、下層にいくに従って粒子が粗くなることから水流を伴う溝であったと考えられる。上・中層は人為的な埋め戻しの様相を示す。南側の方が良好な残存状況である。SD05とはほぼ並走しており、遺構に伴う遺物の時期も一致することから、関連する一連の遺構である可能性が高い。

出土遺物（第8図）

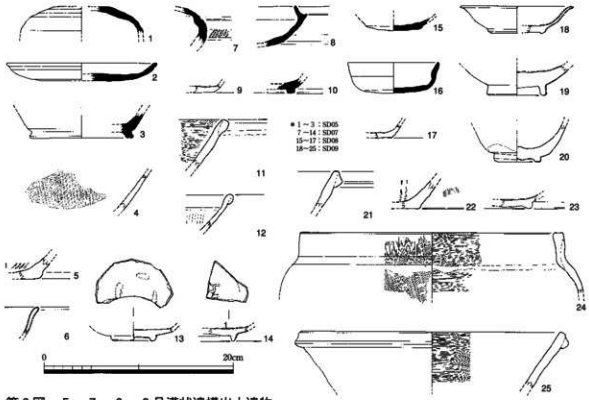
掘り込み面である黒色土からの混入品と、遺構に伴う遺物が混在している。7・8・10は須恵器の供膳具類。いずれも二次的な摩滅が激しく、包含層からの混入品であろう。9は磁器の皿類、染付か。11は土師質の土鍋。内面は丁寧なヨコハケを、外面は粗雑なヨコナデを施し、口縁端部は折り返してナデつけた突帯を持つ。外面の口縁下方に厚く煤が付着している。12は陶器の擂鉢。口縁端部を折り返して玉縁状にし、内面に7条1組の擂目を施す。無釉の焼締系で17世紀代の肥前製品。13・14は陶器の皿。13は黄褐色釉を施しており、見込み部分に砂目痕跡が残る。14は見込みに陰刻文を刻み、青灰色の釉を施している。いずれも釉は掛け流し。17世紀前半の肥前製品。これらも同様に、破断面を含め全体に摩滅が激しい。

SD08（第4図/図版2）

Ⅱ区第1遺構面で検出した、南北方向に流れる溝状遺構。SD07・09を切る。幅1.7m・深さ1.1mを測り、断面はV字型を呈する。調査区中央までこの深さを維持し、唐突に終了する。埋土は粒子の粗い黄褐色砂質土で短期間に埋没した様相を示していた。近世の所産として報告したが、これより新しい時期の遺構である可能性もある。

出土遺物（第8図/図版7）

掘り込み面である黒色土からの混入品と思われる。15・16は須恵器の杯身で16は底部に「卅」のヘ



第８図　５・７・８・９号溝状遺構出土遺物

ラ記号を持つ。17は土師器の皿、底部は回転糸切り。この他にも摩滅の激しい土師器細片が微量だが出土している。

SD09（第4図/図版2）

Ⅱ区第1遺構面で検出した、南北方向に流れる溝状遺構。SD07・08に切られ、SD08と同様に一定の深さを維持したまま唐突に終了する。SD07に合流はしない。東岸をSD08の構築時に削平されているので詳細は不明だが、残存幅1.5m・深さ1.3mを測り、断面はV字型を呈する。遺構底面中央部には浅い溝状の痕跡が確認でき、水流を伴う溝であったと思われる。

出土遺物（第8図）

比較的新しい時期の遺物が出土している。18・23は同安系青磁で白味の強い釉を施す。19は越州系青磁椀。見込み部分に沈線が1条めぐる他、文様は確認出来ない。オリーブ灰色の釉を厚く施す。この2点は中世の堆積層からの混入品か。21・25は土師質の土鍋。内面に丁寧なヨコハケ、外面に粗雑なヨコナデを施す。口縁端部には断面三角形の突帯を貼り付けており、その下方には厚く煤が付着している。22は瓦質の擂鉢。残存部分からは擂目の本数は不明。焼成は悪く、内面を中心に浅黄橙色部分を多く残す。24は瓦質の釜。外面は丁寧なタテハケ、内面には指オサエによる接合痕が残るが、やはり丁寧なヨコハケを施す。20は陶器の椀。高台部分は回転糸切り痕跡を残した削出高台。黄褐色釉を漬け掛けしている。肥前製品か。遺物は破断面を含め、全体に摩滅が激しい。

(ii) 奈良・平安時代の遺構・遺物

土坑4基、井戸1基、溝状遺構1条が該当する。Ⅰ・Ⅱ区の中央部を中心に検出している。埋土は黄褐色粒を含む黒褐色シルトを主体とするものが多い。遺物の出土は極めて少量で、全容がわかるものも少ない。当時の生活の中心的なスペースではなかったと思われる。

SK02（第9図/図版2）

Ⅰ区中央東寄りに位置する。第2遺構面で検出しているが、掘り込み面は第1遺構面であろう。長軸1.5m・短軸1.45m・深さ0.45mを測り、平面プランは円形を呈する。壁面は垂直に立ち上がる。底部北端部に小規模なピットを確認している。埋土は黒色シルトを主体とし、人為的な埋め戻しを行なったと見られる。

出土遺物は極めて微細な土器片のみであるが、埋土の状況からこの時期の遺構と判断した。

SK03（第9図/図版2・3）

Ⅰ区のほぼ中央に位置する。第2遺構面で検出しているが、この遺構もやはり掘り込み面は第1遺構面であろう。長軸1.8m・短軸1.6m・深さは最大で0.7mを測る。壁面は垂直に立ち上がる。底面に土坑状のくぼみを2箇所有する。埋土は黒色シルトを主体とするが、堆積状況からは複数回の掘り直しと埋没の様子が見て取れる。

出土遺物は土師器の細片のみであるが、埋土の状況からこの時期の遺構と判断した。なおこの土坑は、後述する銅戈埋納遺構を切って掘削されている。土坑内の埋土からは銅戈やその時期と関連する遺物は一切確認されていない。

SK10（第9図/図版1）

Ⅱ区中央北寄りに位置する。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。長軸1.0m・短軸0.6m・深さは最大で0.3mを測り、平面プランは楕円形を呈する。壁面は2段階のテラスをもって立ち上がる。

出土遺物は皆無であった。

SK12（第9図/図版1）

Ⅱ区北寄り東端に位置する。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。長軸2.5m・短軸残存長1.2m・深さ0.2mを測り、平面プランは円形を呈する。壁面は垂直に立ち上がり、遺構上面は大幅に削平されていると思われる。埋土は検出面の土と類似する黄褐色砂質土を主体とし、流れ込みによる埋没と見られる。

遺物は全く出土していない。

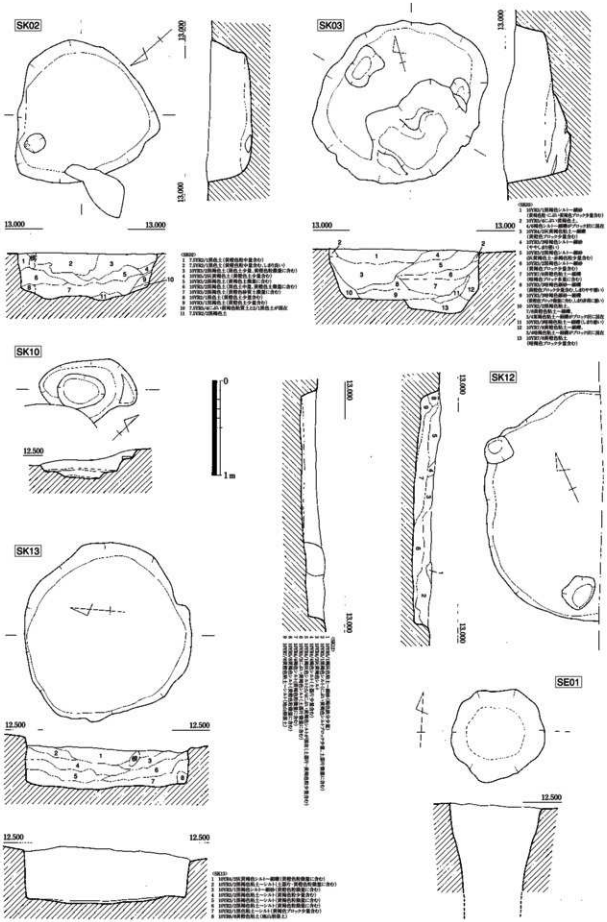
SK13（第9図/図版3）

Ⅱ区北西部に位置し、第1遺構面で検出している。長軸1.9m・短軸1.8m・深さ0.5mを測り、平面プランは円形を呈する。壁面は垂直に立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを主体とする。形状や埋没状況の類似から、SK02・03と同じ性格の遺構と考えられる。一種の粘土採掘土坑か。

極微量の土器片が出土しているが、いずれも細片で時期の特定が不可能であったためここでの図示は控えた。

SD10（第4図/図版2）

Ⅱ区中央西端に位置し、北西から南東へ流れる溝状遺構。幅0.5m・深さ0.2mを測り、断面はU字型を呈する。遺構の規模は小さく形状も不整で、隣接して関連すると思われる別遺構の存在も見られないことから、想定した時期よりも新しく、削平を受けている可能性がある。



第９図　２・３・10・12・13号土坑及び井戸状遺構

出土遺物（第10図）

少量ではあるが土器片が出土している。1は須恵器甕の頸部から体部の破片。外面に格子叩き、内面に同心円文の当て具痕が残る。2は土師器甕、頸部を折り曲げて屈曲させるタイプ。外面に丁寧なタテハケ、内面にタテケズリを施す。3は土師質の杯。低い貼付高台を持ち、全体に不定方向の指ナデを施す。これらの遺物は掘り込み面からの混入品の可能性もある。いずれの遺物も二次的な摩滅が見られる。

SE01（第9図/図版2）

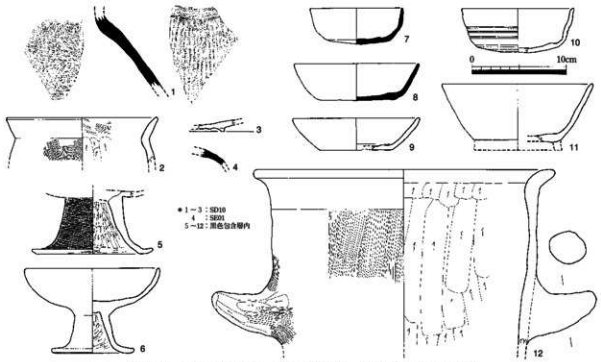
Ⅰ区北寄り東端に位置し、第1遺構面で検出している。直径1.0mの円形を呈する。掘り下げるに従って遺構壁面がすぼまりをみせたのと、検出面から1mの深さを越えた時点で湧水が始まったため、完掘を断念した。この遺構に伴う石積みや木枠等は確認されていないことから、素掘りの井戸と考えられる。埋土は黄褐色粘質ブロックを含む暗褐色土であることから、想定した時期よりも新しい遺構の可能性がある。

出土遺物（第10図）

土師器・須恵器の細片が出土しているが、図示に及ぶものは4の須恵器杯蓋のみであった。

その他、Ⅰ区北東の黒色土内からこの時期の遺物が比較的まとまって出土している。Ⅱ区の調査段階で遺構面と判明したこの黒色土層については、1m四方のブロックを設定して手掘りで掘削を行なったが、SE01の北西部分に遺物の出土が目立って集中しており、その残存状況も良好であった。第10図の5～12（図版7）が該当する土器群である。

5・6は土師器高杯の脚部。5は外面に赤色顔料を塗布している。内外面とも丁寧なタテケズリを施しており、外面については顔料塗布の後緻密なヨコミガキを行なっている。わずかに残る杯部の内面もミガキに似た痕跡が確認できる。6は脚部については内面のタテ・ヨコ双方のケズリのみが明瞭に観察できた。外面にはおそらくタテケズリを施したと思われるが、摩滅のため詳細な単位は不明であ



第10図　10号溝状遺構・井戸状遺構・黒色包含層出土遺物

る。杯部も摩滅が激しいが、わずかに内面にミガキ調整と赤色顔料を塗布した痕跡が残っている。7は底部回転ヘラ切りの須恵器杯身。底部がやや湾曲し、そこからまっすぐ上方に体部が立ち上がるもの。焼成は極めて悪く、表面が溶けている。8も底部回転ヘラ切りの須恵器杯身だが、体部は傾斜して立ち上がる、やや新しい時期のもの。こちらも焼成は悪く、内外面とも表面が溶けた状態である。9・10は土師器の杯身。10は底部に回転ケズリ調整を施し、体部に3条の沈線がめぐる。7と同時期の製品。9は底部回転ヘラ切りを施す、8と同時期の製品。11は土師質の高台杯。底面に貼付高台の剥離痕跡が残る。12は土師器の甑。外面は把手の接合部分にいたるまで丁寧なハケ調整を施す。内面は残存部分の範囲で3段階のタテケズリ。焼成は極めて良好である。これらは杯類の体部立ち上がりの形状に2タイプが並存している点、高杯の調整方法、甑の口縁および頸部の屈曲がゆるやかなくの字を描くことなどから、8世紀初頭の遺物と判断できる。

黒色土内からは、上記の遺物とは異なるブロック内からも土師器・須恵器が相当数出土しているが、いずれも全容を復元できない程度の小片ばかりであった。またその時期についても、口縁部に受部を持つ古墳時代後期の須恵器杯身や口縁内部に細かなハケ調整を施す土師器の甕等、前述の土器群より古い様相を呈している。

以上のことから、SE01の北西部には、明確に遺構として検出は出来なかったが、土器廃棄のための土坑状の遺構が存在したと考えられる。また、この遺構が掘り込まれた黒色土、本報告で言う第1遺構面は古墳時代末頃に形成されたと思われる。

(iii) 古墳時代の遺構・遺物

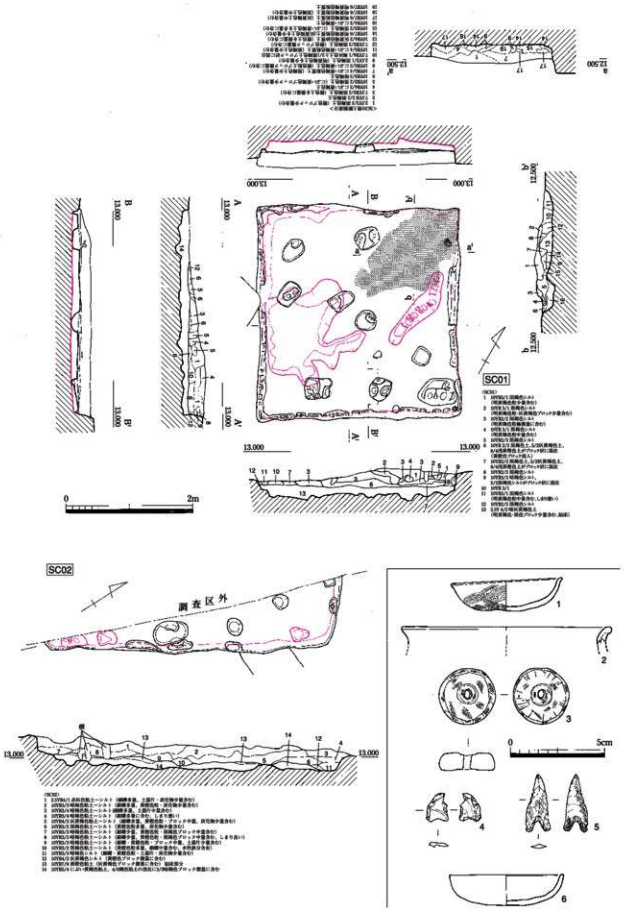
竪穴住居10軒、土坑5基、溝状遺構3条が該当する。調査区のほぼ全域で検出された。詳細は後述するが、竪穴住居は6世紀後半代を中心とし、他の遺構もそれと前後する時期の所産と考えられる。埋土は黒褐色シルトを主体とするものが多い。遺物は完形に近い製品から細片まで比較的まとまった量が出土している。但し竪穴住居内においては、床面直上や焼土内からの遺物の出土が少ない傾向にある。

SC01（第11図/図版3）

Ⅰ区北寄り中央に位置し、主軸は正方位から大きく西にふる。第1遺構面である黒色土層の除去後に検出したが、掘り込み面も第2遺構面と思われる。一辺3.4mの方形で、深さは床面まで0.3mである。壁面は垂直に立ち上がる。西辺をわずかにSK01に切られる。北隅部分を除く壁直下に幅・深さとも0.1m前後の小溝がめぐる。壁材の設置痕跡か。貼床上面で南北に並ぶピットを3箇所確認しているが、いずれも浅く支柱の痕跡とは言いがたい。貼床の下層からも柱穴痕は検出されなかった。小溝のない北隅部分には焼土が多く混じった土の広がりが見られた。カマドを破壊した土の廃棄跡か。第11図の網掛け部分で示した箇所が焼土包含土の確認範囲だが、この部分に床面の焼き締まり等はなく、カマドの位置そのものを特定するものではない。貼床の下面には、用途不明の土坑状のくぼみと、遺構構築時の掘削痕と見られる溝状の掘り込み痕跡が確認された。全面にわたり凹凸が激しく残っており、貼床面の水平状況とは対照的である。住居構築の際、粗掘りを行なった後床面に丁寧に粘土を貼り付けていることがわかる。埋土は黒色シルトを主体とし、黄褐色ブロックや黄橙色粒・土器片等の含有状況に差はあるがほぼ均質である。遺構廃棄後は人為的に埋め戻したと思われる。なお、この住居跡のみ構造・規模・出土遺物・埋土の状況等から、他の住居より若干時期が先行すると考えられる。

出土遺物（第11図/図版7・8）

1は土師器の杯。丸く立ち上がる体部とわずかに外反する口縁部を持つ。底部は湾曲し、指頭圧痕を多数残す。全体にひずみが目立ち、外面上部には黒斑が認められる。内面は板状工具による粗いナデ、外面は不定方向のハケを施す。北隅の焼土包含土内から出土した。古墳時代中期末の所産。2は



第11図　1・2号竪穴住居（S＝1/60、カマド部分はS＝1/20）及び出土遺物（石製品のみS＝1/3）

土師器の甕。口縁端部のみの出土で端部は丸みをもって仕上げられている。内外面とも指ナデ調整を施し、内面は被熱により黒斑化している。床面直上からの出土。3は滑石製の紡錘車。中央穿孔部周辺に表裏両面とも浅い刻り込みを施す。側面はわずかではあるが研磨の単位が残る。裏面に放射線状の擦痕。2と同じ層からの出土。4は黒曜石製の石鏃。全体に摩滅を受け、表面に光沢はない。5は黒曜石の剥片鏃。表面中央のみに稜を持つ。4・5は混入品と思われるが参考のため図示した。

SC02（第11図/図版3）

Ⅰ区南寄り西端に位置し、調査区西側に延長する。第1遺構面である黒色土層の除去後に検出したが、土層断面から掘り込み面は第1遺構面であることが確認できた。表土除去段階で上部を削平している。東辺でSD02を切る。主軸は正方位から東にふる。一辺4.5mの隅丸方形を呈すると思われ、深さは床面まで0.35m、壁面はやや外傾して立ち上がる。床面では複数のピットを確認しているが、いずれも浅く位置も適当ではないため主柱穴でないと判断した。埋土は暗褐色シルトを主体とし、遺構廃棄後は人為的な埋め戻しを行なったと思われる。壁際の溝、カマドと見られる施設や、その廃棄を示す痕跡・遺物は確認できなかった。貼床の下面には遺構構築時の掘削痕であろう、浅い凹凸の掘り込み痕跡が認められる。

出土遺物（第11図）

全体の形状が明らかな遺物は1点のみ確認している。6は土師器の杯。湾曲した底部から体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部は直上を向く。摩滅により調整は不明であるが、胎土は極めて精良である。古墳時代後期初頭の所産。

SC03（第12図/図版1）

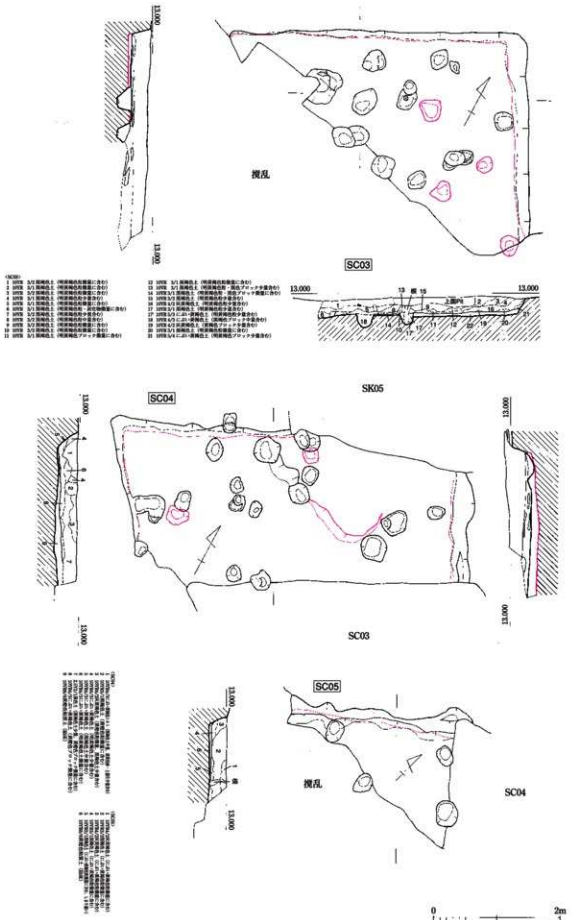
Ⅰ区南端に位置し、SC04を切る。南側は後世の造成で削平されている。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。主軸は北東ー南西方向。残存部から一辺4.7m四方の方形を呈すると思われる。深さは床面まで0.3m、壁面はやや外傾して立ち上がる。床面及び貼床底面では複数のピットを確認しており一部には杭痕跡も確認されているが、その並びに規則性はなく平面プランとの位置関係にも問題があるため、4主柱穴とは考えがたい。埋土は黒褐色シルトを主体とし、SC04・05とも共通する。含有物の種類・量に差はあるが全体に均質であり、人為的に埋め戻された様相を示す。カマドと見られる施設やその廃棄痕跡は認められない。貼床は薄く、その下層も平坦な構造である。

出土遺物（第13図）

土師器・須恵器の供膳具及び調理具が出土している。但しいずれの遺物も小片であり、残存状況は悪い。1は土師器の杯部口縁。丁寧なヨコナデを施し、内面にはわずかに赤色顔料の痕跡が残る。高杯か。上層からの出土。2～4は須恵器の杯蓋。頂部は回転ヘラ切りで平坦に仕上げ、受部が平たく延びるもの。かえりは断面三角形で短く、内傾している。7世紀前半の所産。上層からの出土。5～7は須恵器の杯身。底部は回転ヘラ切りで平坦に近い形状、体部はわずかに外傾して立ち上がり、口縁部は薄くシャープに仕上げられている。8・11は須恵器の瓶類。8は口縁部。中央に2条の沈線がめぐる。11は肩部でタテ方向のカキメを施した上に貼付把手の痕跡が残る。9・12は土師器の甑。口縁部は端部のみが外反し、内面タテケズリ、外面タテハケを施す。体部両側に角型把手を貼り付ける。埋土上層からの出土。10・13は土師器の甕。口縁部が頸部から深いカーブを描いて外反する大型のものと緩やかに外反する小型のものが混在している。内面ヨコケズリ、外面タテハケ調整を施す。埋土上層からの出土。

SC04（第12図/図版1）

Ⅰ区南端に位置し、SC03・SK05に切られSC05を切る。南側は後世の造成により削平されている。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。主軸は北東ー

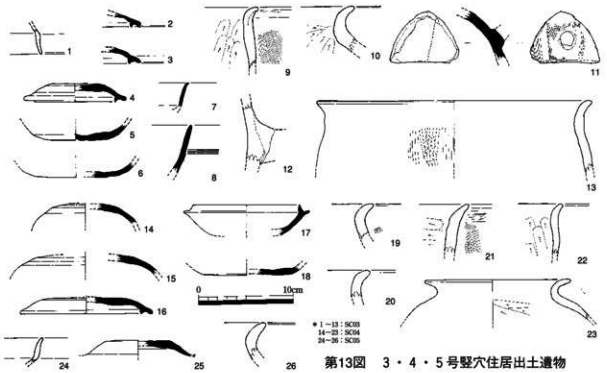


第12図　3・4・5号竪穴住居（S＝1/60）

南西方向。残存部から一辺5.5m四方のややひずんだ方形を呈すると思われる。深さは床面まで0.3m、壁面は外傾して立ち上がる。床面及び貼床底面では複数のピットを確認しているが、その並びに規則性はなく平面プランとの位置関係にも問題があるため、4主柱穴とは考えがたい。埋土は黒褐色シルトを主体とし、含有物の種類・量に差はあるが全体に均質である。人為的に埋め戻された様相を示す。カマドと見られる施設やその廃棄痕跡は認められない。貼床は北側が極めて薄く、南へいくに従って厚みを増す。北側中央部に浅い掘り込みとテラス状の高まりが確認されている。

出土遺物（第13図）

土師器・須恵器の供膳具及び調理具が出土している。SC03と同じくいずれの遺物も小片であり、残存状況は悪い。14～16は須恵器の杯蓋。頂部はいずれも回転ヘラ切りだが、14・15のように丸みを持ちケズリを施す古手のものと、16のように扁平な形状でかえりを持つものが混在している。17・18は須恵器の杯身。17は受部とかえりを持ち古墳時代の様相を色濃く残すもの。18は平坦な底部から体部が外傾してまっすぐに延びる、比較的新しい時期のもの。19・20・23は土師器の甕。口縁部は頸部から深いカーブを描いて外反し、内面はヨコケズリ、外面タテハケ調整を施す。21・22は甑の口縁～体部。端部は短く外反し、外面はいずれもタテハケ調整であるが、内面はヨコケズリとタテケズリが混在する。遺物の様相はSC03よりも古く、7世紀初頭の所産と考えられる。



第13図　3・4・5号竪穴住居出土遺物

SC05（第12図/図版1）

Ⅰ区南端に位置し、SC04に切られる。南側は後世の造成により削平されており、残存状況は全体の四分の一以下である。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が認められず、基盤層で検出している。主軸は北東－南西方向。平面プランは方形と思われるが規模は不明、深さは床面まで0.25mを測る。壁面は外傾して立ち上がり、二段掘り込みの痕跡が見られる。床面及び貼床底面で4基のピットを検出しているが、いずれも4主柱穴とは関連しない。埋土は黒褐色シルトを主体とし、含有物の種類・量に差はあるが全体に均質で、人為的に埋め戻された様相を示す。カマドと見られる施設やその廃棄痕跡は認められない。貼床は全面にわたって薄く、その下層も極めて平坦な構造である。

出土遺物（第13図）

極少量の土器片が出土している。24は土師器の杯身。口縁端部は薄く仕上げられ、外側へわずかに屈曲する。貼床内からの出土。25は須恵器の杯蓋。頂部が平坦で口縁部にかえりをもつもの。埋土中層からの出土。26は土師器の甕、口縁部が頸部から深いカーブを描いて外反するもの。下層からの出土遺物。

SC06（第14図/図版3）

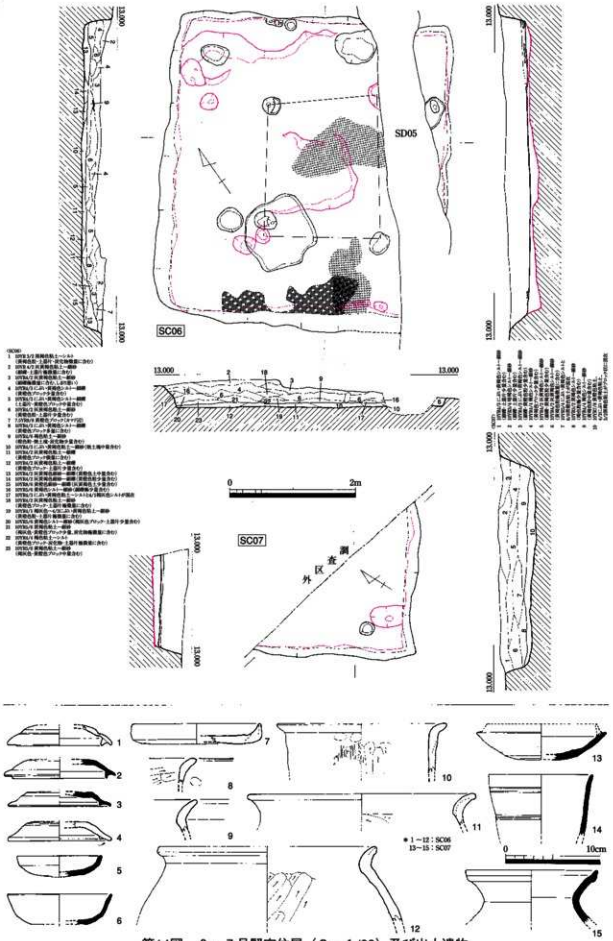
Ⅱ区北寄り中央に位置し、第1遺構面で検出している。SD05に切られ、SC09・SK11を切る。主軸は正方位から東へふる。一辺5.0mの方形を呈し、床面までの深さは0.4mを測る。壁面は北側のみ直立、その他は外傾して立ち上がる。不整方形を描く直径0.2m・深さ0.4mのピット群を4主柱穴と想定した。埋土は暗褐色シルトを主体とし、人為的に埋め戻した様相を示す。床面中央に焼土ブロックを多量に含む土の堆積を、南辺に沿ってU字型の焼土・焼き締まった粘土の残存とその東隣にやはり焼土を含む土の堆積を確認している。南辺中央にカマドを設置しており、住居の廃棄に伴ってこれを破壊し、廃土はカマドの脇と住居中央部に投棄したと考えられる。カマド祭祀に関わるようなまとまった遺物の出土は見られない。カマド正面に浅い土坑が認められるが機能は不明である。北辺に沿って貼床下層にはテラス状の段差が確認されているが、全体に凹凸が激しいことから構築時の粗略な掘削の痕跡であり、何らかの施設である可能性は低いと思われる。

出土遺物（第14図）

いずれも小片だが、土師器・須恵器の供膳具と土師器の調理具が出土している。1・4は土師器の杯蓋。1は頂部に丸みを残しかえりも大きいやや古手のもの。4は頂部を平坦に整え、形骸化したかえりを持つ。2・3は須恵器の杯蓋。頂部を回転ヘラ切りで平坦に仕上げ、湾曲した受部と断面三角形のかえりを持つ。7世紀半ばの所産。5・6は須恵器の杯身。底部は回転ヘラ切りのみでケズリ調整は行なわない。体部は湾曲して立ち上がる。7は土師器の皿。底部・体部とも厚く、口縁部はわずかに上方につまみ上げるのみである。9・11・12は土師器の甕。口縁部は短いが深くカーブして外反し、内面にナナメケズリ、外面にタテハケ調整を施すもの。9は土坑内、11は貼床内、12は床面直上からの出土。8・10は土師器の甑。口縁部は短く外側に屈曲し、内面はヨコケズリとタテケズリが混在している。外面はタテハケ調整を施すが、頸部に口縁部調整時の指頭圧痕を残す。8は上層、10は貼床内からの出土。

SC07（第14図/図版4）

Ⅱ区北西に位置し、遺構の大部分は調査区外へ延長する。第1遺構面で検出しており、SC08を切る。主軸は正方位から若干西へふる。平面プランは方形と思われるが規模は不明。深さは0.6mを測り、本遺跡で検出された住居群の中では最も残りが良い。壁面は外傾して立ち上がる。遺構床面では2基のピットを検出しているが、いずれも4主柱穴とは関連しない。埋土は暗褐色シルトを主体とし、人為的に埋め戻した様相を示す。カマドと見られる施設やその廃棄痕跡は、検出範囲からは認められない。貼床は厚めに施されているが、その下層もほぼ平坦な構造である。



第14図　6・7号竪穴住居（S＝1/60）及び出土遺物

出土遺物（第14図）

極少量だが土器片が出土している。13は須恵器の杯身。かえり部分は破損している。底部外面に回転ケズリを施し、「廾」のヘラ記号を刻む。14は須恵器瓶類の口縁部。直立し、端部は薄く、わずかに外反する。口縁部直下に2条の、下方に3条の沈線がめぐる。15は須恵器の甕。口縁端部は断面三角形状を呈し、頸部は絞り込み後屈曲させて仕上げる。工具を使用した調整痕、文様は認められない。

SC08（第15図/図版4）

Ⅱ区北西に位置し、北東隅をSC07に、北西隅の上部を後世の攪乱に切られる。第1遺構面で検出している。主軸は正方位から若干西へふる。一辺4.5mの方形を呈し、床面までの深さは0.35mを測る。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色シルトを主体とし、人為的に埋め戻した様相を示す。床面及び貼床下層で複数のピットを検出しているが、遺構の平面プランとの位置関係と各ピットの底面レベルから、図示した4基を4主柱穴と判断した。南西隅に不整形の浅い土坑を掘り込んでいるが、機能は不明である。湿気抜き用の土坑か。また、北辺中央に焼土ブロックを含む土の堆積を確認している。これがカマド痕跡であるとは断言できないが、他の3辺には焼土痕跡の残存が見られないことから、北辺に設置されていた可能性は極めて高い。貼床は薄いが全面に施されており、下層もほぼ平坦な構造をとる。

出土遺物（第17図）

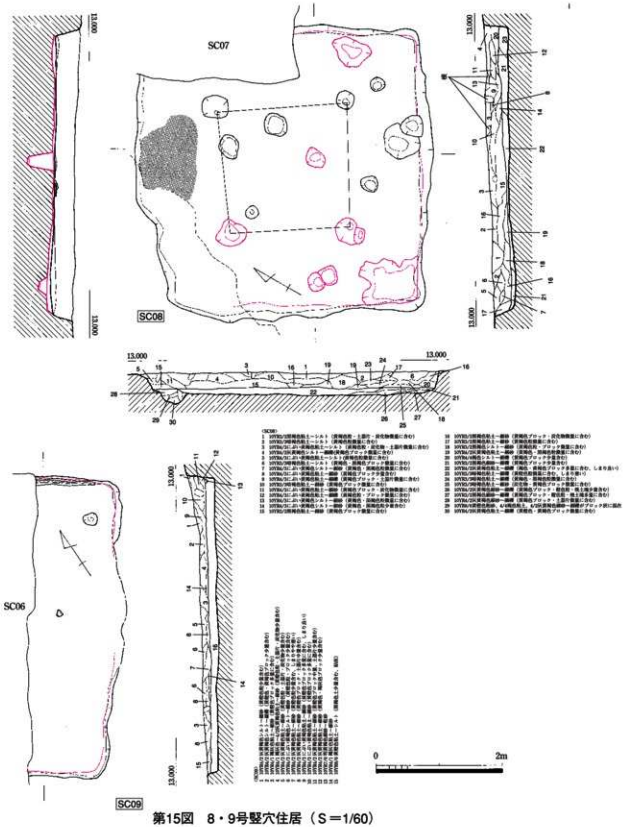
少量だが土師器・須恵器の供膳具等が出土している。1・2は須恵器の杯蓋。頂部は回転ケズリを施し、口縁部は内傾して仕上げられる。3・6は須恵器の杯身。6は底部外面に手持ちケズリを施す。焼成は悪く、破断面に赤褐色部分が残る。貼床内からの出土。4・5は土師器の杯身。4は内面に不定方向のミガキ、外面にはヨコミガキを施すやや古手のもの。5はかえりを持ち、内面ヨコミガキ、外面ケズリを施す。若干新しい時期のもの。いずれも胎土は精良である。7は土師器の高杯脚部。端部は稜をもって外側に屈曲する。内面ヨコケズリ、外面タテケズリ調整。9・10は土師器の甕。9は口縁端部が短く外反するもの。口縁部内外に薄く煤の付着が認められる。内面ナナメケズリ、外面タテハケ調整。10は口縁部が深くカーブして湾曲するもので、端部はわずかに外側へ折り返して丸く仕上げる。頸部から体部にかけて外面に煤の付着が見られる。内面不定方向のケズリ、外面タテハケ調整。

SC09（第15図/図版3）

Ⅱ区北寄り中央に位置し、SC06に東側を大幅に削平される。南西隅はSC10を切り、遺構底面からはSK11を検出している。第1遺構面での検出。主軸は正方位からやや東へふる。一辺4.8mの方形を呈し、床面までの深さは最大で0.4mを測る。北壁際に幅・深さとも0.1m程度の小溝を掘り込む。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗褐色土を主体とし、人為的に埋め戻した様相を示す。床面及び貼床下層から検出されたピットは1基のみで、隣接するSC06内のピット群も含めて4主柱穴の存在を検討したが、明確にそれと認められるものはなかった。カマドと見られる施設やその廃棄痕跡は確認されていない。貼床は全面に厚く施されており、その下層もほぼ平坦な構造をとる。SC06とは掘り込み底面のレベルがほぼ一致しており、SC06の下層に当遺構の痕跡は残存していない。

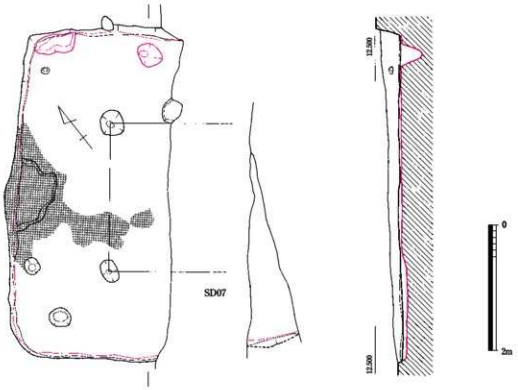
出土遺物（第17図/図版7）

土師器・須恵器の破片が出土している。11・12は須恵器の杯蓋。いずれもかえりを持たないもので、頂部にケズリを施し、口縁部は内傾してまっすぐに下方に延びる。13～15は須恵器の杯身のうち口縁部にかえりを持つもの。15のようにしっかりと残るものと14のように形骸化したものが混在している。16・17は須恵器の杯身のうち、かえりのないもの。底部にケズリ調整を施す。18は須恵器高杯の脚部。内面にナナメの絞り痕跡を残し、外面にカキメ状の沈線を多重に施す。19・20は甕の口縁部及び体部。口縁部は稜をもち全面ナデ調整。体部には沈線を2条めぐらし、その間に櫛状工具を使用して斜線文を施す。21は土師器高杯の脚部。22は須恵器瓶類の体部。深い沈線で区切った空間に斜線文を施



第15図　8・9号竪穴住居（S＝1/60）

す、20と同じ施文方法。23・24は土師器の甕。23は口縁部が深くカーブして外反する。24は口縁を緩く外側に広げる。内面は指オサエの後ヨコハケ調整を行い、オサエのくぼみ部分に痕跡が残る。外面は並行の叩き文。



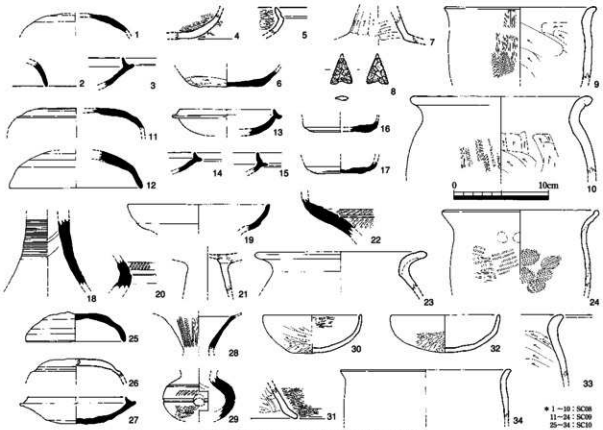
第16図　10号竪穴住居（S=1/60）

SC10（第16図/図版4）

Ⅱ区のほぼ中央に位置し、第1遺構面で検出している。SD05・07・08・09に切られる。東半部の状況は不明であり、SD07・09間の岸部分にわずかに掘り込み痕跡が認められるのみである。主軸は正方位から東へふる。一辺5.1mの方形を呈し、床面までの深さは最大0.5mを測る。壁面は緩く外傾して立ち上がる。北西方向の隅に不整楕円形の土坑を持つが用途は不明。床面及び貼床下層で検出したピットの内、規則性をもって配置されるものを4主柱穴と判断した。東側の2基はSD07によって削平されている。西辺に沿って焼土ブロックを含む土の堆積と、その下層の掘り込みを確認している。カマドと明確に判断できる施設は残存していないが、おそらくこの位置にカマドを構築していたと見られる。埋土は暗褐色シルトを主体とし、掘り込み下層では黄褐色粘質土ブロックを多量に含む土の堆積を確認している。但し、他の竪穴住居で検出した貼床状粘土層は見られなかった。

出土遺物（第17図/図版8）

土師器・須恵器の供膳具・調理具が破片ではあるが出土している。25は須恵器の杯蓋。頂部にケズリ調整を施し、体部は湾曲して口縁部に繋がり、端部は丸く仕上げる。26は土師器の杯蓋。成形技法は25と共通する。27は須恵器の杯身。かえりは短く内傾する。底部に回転ケズリ調整。28・29は須恵器の甕。口縁部には波状文を、体部には沈線を2条施した後その間に斜線文を櫛状工具で刻む。底部はヨコハケ調整。30・32は土師器の杯身。外面は不定方向のケズリ、内面は30のみミガキ痕跡が確認できるが、32も同じ調整を施すタイプと見られる。31は土師器高杯の脚部。内面は不定ケズリ、外面はヨコミガキ。本来は赤色顔料を塗布していた可能性もある。33・34は土師器の甕。いずれも口縁部が短く外反するもの。内面ナナメハケ、外面は確認できないがタテハケか。いずれの遺物も7世紀初頭の所産。



第17図　8・9・10号竪穴住居出土遺物

SK01（第18図/図版1）

Ⅰ区北西に位置し、基盤層上層の黒色土を掘削した後に検出したが、第2遺構面からの掘り込みと思われる。SC01を切る。長軸1.6m・短軸1.3m・深さ0.35mを測り、平面プランは隅丸長方形を呈する。壁面は外傾して立ち上がる。主軸はほぼ正方位を指す。埋土は黒色土1層。

出土遺物は皆無である。

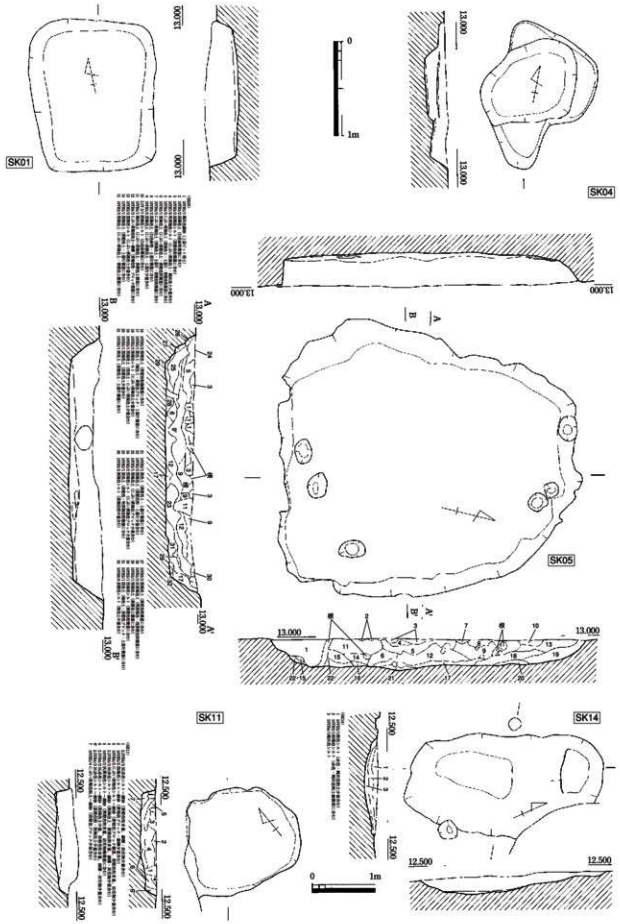
SK04（第18図/図版1）

Ⅰ区中央西寄りに位置する。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。長軸1.2m・短軸1.6m・深さ0.25mを測り、主軸は東西方向を示す。平面プランは楕円形で南北と東にテラスを持つ。壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色土1層で、SK01より新しい時期の所産と思われる。

遺物は出土していない。

SK05（第18図/図版4）

Ⅰ区南端に位置し、SC04・SD02を切る。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。長軸4.7m・短軸4.2m・深さ0.5mを測り、主軸は正方位より若干西へふる。平面プランはややいびつな楕円形を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。上面は後世の造成に伴い削平されていると思われる。埋土は黒褐色土を主体とし、黄褐色粒等の含有物に差はあるが、概ね均質である。堆積状況からも短期間に人為的に埋め戻されたと思われる。切り合い関係のあるSC03・04・05の埋土とも類似性が高く、時期差はさほどないだろう。底面からは6基のピットを確認しているが、この遺構に伴う可能性は低い。遺構の性格は不明だが、廃棄土坑の一種か。



第18図　1・4・5・11・14号土坑（5・11・14号はS＝1/60）

出土遺物（第19図/図版8）

小片を中心とし、量もわずかではあるが土師器・須恵器が出土している。1・2は須恵器の杯蓋。頂部は回転ヘラケズリを施し、体部はそこから丸味をもって下方に延びる。口縁端部は面をもって仕上げている、古手のもの。3は同じ須恵器の杯蓋だが、こちらは短いかえりをもつ新しい時期のもの。4は須恵器の高台杯。高台部分は輪状の剥離痕となって残る。5は瓶類の頸部。外面に多重のカキメ痕。6は土師器の杯身。底部外面に手持ちケズリを施す他は全体にナデ調整。7?9は土師器の高杯。口縁部は薄く仕上げられ直立し、稜をもって湾曲して底部へ向かう。内面は板状工具によるタテケズリ、外面はヨコミガキ。脚部は8の字型に広がり、端部は薄くなだらかに仕上げる。10・11は土師器の甕。口縁部は短く外反し、内面上部はタテケズリ、下部は不定方向の細かいケズリ調整を施し、外面はタテハケで調整する。11には体部に角型把手の貼付痕跡が残る。底部は丸みを帯び、穿孔した後端部をナデ調整で仕上げる。14〜16は土師器の甕。14は口縁部は深いカーブをもって外反し、頸部に稜をもつ。内面ヨコケズリ、外面タテケズリ調整。15は外面を不定方向のハケで仕上げ、底部は丸い。16は口縁部から頸部まで連続したカーブが続くもの。口縁部の外反調整時の指頭圧痕が残り、体部外面はタテハケ。17は滑石製の紡錘車。表裏ともに十字の沈線文を施し、断面は台形を呈する。側面は縦方向のミガキ調整。18は砂岩の投弾。

SK11（第18図/図版4）

Ⅱ区中央北寄りに位置する。SC09の貼床下層で検出した。長軸1.8m・短軸1.6m・深さ0.25mを測り、平面プランは不整楕円形を呈する。主軸は東西方向からやや南へふる。壁面は基本的に緩く外反して立ち上がるが、一部内側へえぐれる部分がある。埋土は灰黄褐色を主体とし、人為的に埋め戻した様相を示す。廃棄土坑の一種か。

出土遺物（第19図）

1点のみ図示している。19は須恵器の甕の体部。外面格子叩き、内面同心円文当て具痕。その他、細片ではあるが土師器・須恵器が少量出土している。

SK14（第18図/図版1）

Ⅱ区西寄りに位置し、SK13に切られる。第2遺構面で検出している。長軸3.1m・短軸1.6m・深さ0.2mを測り、平面プランは楕円形を呈する。主軸は正方位からやや東へふる。北側にテラス状の平坦面が見られる。遺構全体が底面と壁面の判然としない落ち込み状の形状を示す。埋土は黒褐色シルトを主体とするが、周辺からの流れ込みか。

土師器・須恵器の小片が出土しているが、いずれも細片のため図示は控えた。

SD02（第4図/図版1）

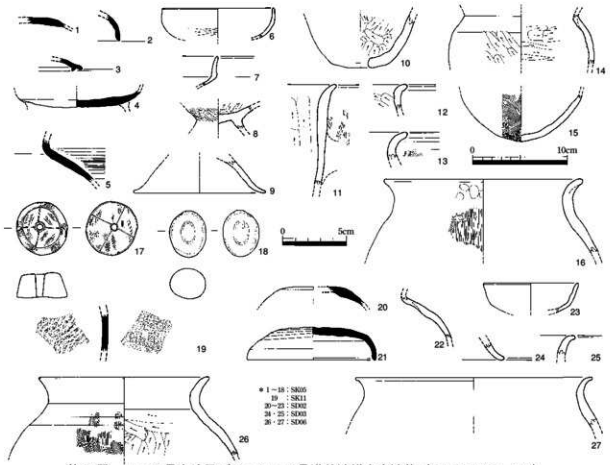
Ⅰ区南西に位置し、東西方向に流れる溝状遺構。SC02・SK05に切られる。遺構が位置する箇所には黒色土の堆積が見られなかったため、基盤層で検出している。幅・深さとも0.2m、断面はU字型を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。埋土は黒褐色シルトを主体とする。隣接して同時期もしくは関連すると見られる遺構はなく、性格は不明である。

出土遺物（第19図）

土師器・須恵器が少量出土している。20・21は須恵器の杯蓋。頂部に回転ケズリ調整を施し、平坦に仕上げる。体部は丸みをもって下方へ延び、端部は平面的におさめる。22は土師器の甕の体部。摩滅のため調整は不明。23は土師器高杯の杯部。内外面とも丁寧なナデ調整。

SD03（第4図/図版1）

Ⅱ区北西に位置し、南北方向に流れる溝状遺構。第1遺構面で検出している。幅最大0.7m・深さ0.5mを測る。壁面は垂直に立ち上がるが、平面・断面とも不整な形状を示しており、SC08を切る攪乱と一連の遺構の可能性もあるが詳細は不明である。埋土は黒灰色シルトを主体とし、流れ込みによ



第19図　5・11号土坑及び2・3・6号溝状遺構出土遺物（17・18はS＝1/3）

り埋没したと思われる。

出土遺物（第19図）

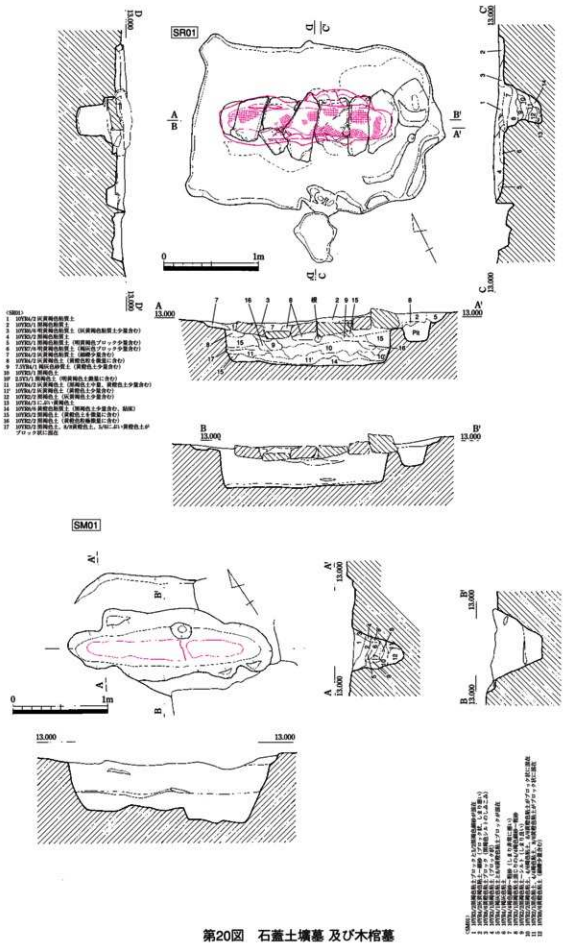
少量の須恵器・土師器が出土している。24は土師器高杯の脚部。内外面ともヨコナデによる調整。25は土師器甕の口縁部。調整は摩滅により不明瞭だがヨコナデか。

SD06（第4図/図版2）

Ⅱ区北西部に位置し、第1遺構面で検出している。北西部分はⅠ区へ延長するが、こちらは黒色土掘削の際に削平してしまっている。幅0.5m・深さ0.3mを測り、断面はU字型を呈する。壁面は垂直に立ち上がる。埋土は灰黄褐色土を主体とし、人為的な埋め戻しを行なった様相を示す。SC08とほぼ並走し、住居群の境界を示す溝であった可能性がある。

出土遺物（第19図）

少量の土器片が出土している。26・27とも土師器の甕。いずれも口縁部は深いカーブを描いて外反するもの。26は外面タテハケ、内面は体部にタテケズリを施した後、頸部のみヨコケズリで仕上げる。27は摩滅のため内外面とも調整は不明。



第20図　石蓋土壙墓 及び木棺墓

(iv) 弥生時代の遺構・遺物

SR01（第20図/図版5）

Ⅰ区中央西寄りに位置し、第2遺構面で検出している。上層土掘削段階で石材が露出しており、上面は後世の造成で若干削平を受けていると思われる。主軸は東西方向からやや南にふる。検出プランは長軸2.7m・短軸1.8m・深さ0.1mの隅丸長方形で、これをテラス状の付属施設として、その中心に長軸1.8m・短軸0.4m・深さ0.3mの墓坑を構築している。テラスは東辺の一部の段差と、北東部にピットを1基持つ他は全体に平坦に仕上げられている。墓坑は長楕円形で、遺構底面にまだらに赤色顔料の残存が確認された。埋葬祭事に伴うものと見られる。埋土の状況からは棺の使用は認められず、直接埋葬を行なったと思われる。埋土は黒褐色土を主体とし、黄褐色土等含有物に若干の差はあるが概ね均質である。埋葬後、墓坑の上面全体を覆うように7点の大型石材と、その間隙を埋めるように小型石材を少量設置している。石材は0.5×0.3m大、厚さ0.15m前後の不整長方形を基本としており、粗くではあるが整形した痕跡を残す。石の長軸と遺構の短軸方向はほぼ一致しており、石材の設置底面レベルも平坦である。埋葬については比較的厳密な作法があったと想定できる。石材同士は目張り粘土で隙間をふさぎ、かつしっかりと固定されていた。

遺構内からの遺物の出土は、後世の堆積土からの混入品である土師器片1点のみで、墓坑・テラスを問わず遺構に伴う遺物は一切確認されていない。また炭化物・焼土等の検出も見られなかった。

SM01（第20図/図版5・6）

Ⅱ区南西隅に位置し、第2遺構面で検出している。南および東側は撹乱により削平されており、遺構の全容は不明である。主軸は東西方向からやや南にふる。検出プランは長軸2.1m・短軸0.7m・深さ最大0.7mの長楕円形であるが、北側に一部テラス状の痕跡が見られることから、SR01と同様、浅い隅丸長方形のテラスを持っていた可能性が高い。墓坑の形状はいびつで南北両辺に小型のテラス状痕跡が残る。掘り込みは2段階にわたって行なわれており、まず深さ0.5～0.7mの粗略な墓坑を彫り上げた後、東側を中心に黄褐色粘質土で貼床を施し、底面を平坦に整えている。この貼床には湿気抜きの効果もあったと思われる。なお墓坑の底面は東側のみ深い掘り下げを行なっているが、その理由は不明である。その後少量の土を敷き詰め、被葬者を入れた木棺を安置する。木棺の側面から土を入れ、こちらが完全に埋まってから上面に土を入れ込んでいる。

遺物の出土は、後世の堆積土からの混入品である土師器片のみで、明確に遺構に伴うと判断できる遺物は一切確認されていない。また周辺のテラス状部分や撹乱内も含めて、炭化物・焼土等の検出も見られなかった。

石蓋土壙墓・木棺墓については遺構の時期を示す遺物は出土していないが、ともに主軸方向を同じくし、埋土の状況が類似することから同時期の遺構と判断した。また本遺跡の北西に位置し同時期に発掘調査を実施していた寺福童遺跡5においては、弥生時代前期～後期にわたる甕棺・木棺・石棺・土壙墓の各種が見られる墓域が営まれていたことから、この時期の遺構であると判断した。弥生時代中期の遺構としては、他にも銅戈埋納遺構を検出しているが、これについては3項にて別途記す。

なお、その他に第1遺構面である黒色土内や、これまで報告してきた各遺構の埋土から、弥生時代中期の所産と見られる丹塗土器の細片が出土している。この時期の遺構として検出したのは上記の2基のみであるが、周辺に弥生時代の遺構が存在する、もしくは現存する遺構に破壊されてしまったがかつては本遺跡にも弥生時代の集落が存在した可能性はある。

(v) その他の遺構・遺物

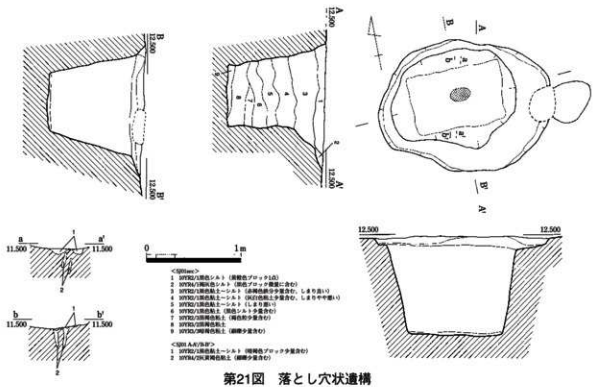
SJ01（第21図/図版6）

Ⅱ区北西隅に位置し、第2遺構面で検出している。主軸は東西方向の正方位に一致する。平面プランは不整楕円形を呈するが、これは後世の崩落に伴うものであろう。掘り込みは2段階にわたって行なわれており、遺構底面ははっきりとした長方形を呈する。底面中央に楕円形に異なる土が含まれる部分があり、完掘状況の撮影後に遺構全体を半裁した結果、この部分に杭を打ち込んでいたことが明らかとなった。杭痕跡は断面からの復元によると計0.1m程度の丸杭で、先端を尖らせていたようである。なお、この楕円形部分以外にも杭痕跡が残存していないか、遺構底面の複数の箇所を半裁掘削したが、これ以外に杭打ち込み痕を検出することはできなかった。小郡市内で確認されている落とし穴状遺構のうち、低位段丘に構築されるものの典型的な形状である。本遺跡の北に位置する寺福童遺跡3においても落とし穴状遺構が検出されており、台地上に展開した一連の狩猟痕跡と考えられる。埋土は黒色シルトを主体とし、全体にしまりが良い。黄褐色粒等含有物には差があるが、全体に均質であり、短期間に人為的に埋め戻されたと見られる。

出土遺物は皆無であり、遺構の時期は不明である。

SD01（第5図/図版5）

Ⅰ区北寄りからⅡ区南寄りへ全調査区を斜めに縦断する形で検出した。第2遺構面からの掘り込みを確認している。幅最大1.0m・深さ0.2～0.4mを測り、断面は長方形を呈する。南東でSD05・07に切られ、それより南・東へは延長しない。SC01・07・08と並走し、これらと関連する区画溝の可能性もあるが詳細は不明である。埋土は遺構の部分によって変化するが、Ⅰ区では黒色シルト、Ⅰ・Ⅱ区間の低まった部分では黒灰色粘土、Ⅱ区中央では黒褐色シルトを主体とする。流れ込みによる自然埋没の様相を示す。埋土には水性鉄が多量に含まれていることから、水を伴う施設であったと見られる。



第21図　落とし穴状遺構

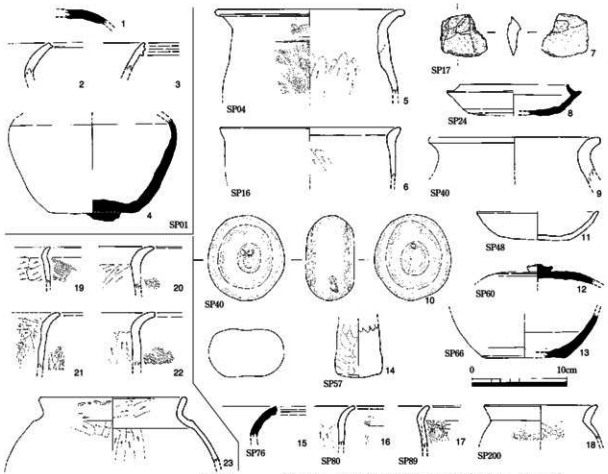
出土遺物（第22図）

少量の土器片が出土している。1は須恵器の杯蓋。頂部に回転ケズリを施す。2・3は土師器の甕片。口縁部が深いカーブを描いて外反するもの。端部は沈線状の段差をもって仕上げる。4は須恵器壺の肩部から底部。底面には溶着した粘土塊が付着しており、本体にも降灰による自然釉と焼けひずみが見られる。遺物は古墳時代後期のものを主体とするが、掘り込み面との関係からこれらは埋没時の混入と考えられ、遺構そのものの時期は不明である。

黒色土内包含遺物（第22図/図版8）

第1遺構面である黒色土内からは、いずれも摩滅の激しい小片であるが土師器・須恵器が多数出土している。ここではその中の比較的残存状況の良好なものを図示して紹介しておく。なお第1遺構面から掘り込まれている遺構の時期と出土遺物から、この黒色土層の堆積は古墳時代後期初頭と考えられる。19・23は土師器の甕。19は口縁部が短く外反する小型のもの。内面は幅広で単位の細かいヨコケズリ、外面はナナメハケを施す。23は頸部から口縁部が短く立ち上がり、肩部に稜を持つもの。内面については口縁部はヨコケズリ、体部はタテケズリを施し、外面口縁部にわずかに工具痕を残す。体部はヨコケズリ調整。

この他、遺跡内で検出したピットの埋土からも細片ではあるが土器片・石器類が出土している。これらのピット群は現地および調査終了後に遺構配置図上から検討したが、掘立柱建物を構成するにはいたらなかった。ここでは出土遺構名のみを記し、図示しての紹介にとどめる。



第22図　その他の遺構出土遺物（7のみ　S=1/3）

（3）銅戈埋納遺構

(i) 遺構の検出状況

本遺跡の調査開始からわずか5日後、平成16年6月18日、SK03の掘削途中に、これに切られる銅戈埋納遺構の存在を確認した。土坑と接する面に鋒を北東に向けて1口のほぼ全面が露出している状態が見て取れた（写真3、9号銅戈とする）。これに近接して、遺構面と判断していた黄褐色ローム部分に、直径1cm前後の青色遺物を併せて検出している。これらは発見のきっかけとなったものとは逆に、鋒を南西に向けた状態の銅戈の胡部分3口分であることが判明した（写真4、上から順に3号・5号・7号銅戈）。9号銅戈はSK03掘削の際に上方の鋒を破損しており、もろく粉っぽい感触の断面が覗いていた。

遺物の状態が極めて脆弱であったことと、調査開始時期が入梅の直前でその後本格的な夏の到来を控えていたことから、埋納遺構の掘削を含めた調査と遺物総数の把握、露出遺物の補強処理は急を要する作業となった。以後、約1ヶ月間にわたり、埋納遺構上面には風雨を避けるためのテントを常設し、埋納遺構の掘削と遺物総数の把握については上田が、遺跡全体の調査は北口が、遺構の切り取りとその後の処理については山崎が担当し、それぞれ作業を進めることとした。

写真3　銅戈埋納遺構①（遺構確認段階、3号土坑内から）

写真4　銅戈埋納遺構②（遺構確認段階、北西上方から）

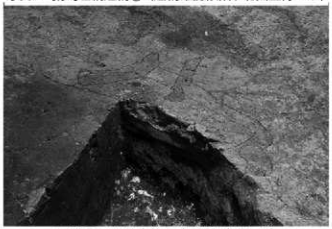


写真5　埋納木箱想定状況（西から）

写真6　3号土坑との切り合い部分（北西横断面）

(ii) 現地調査における見解

埋納遺構の平面・断面プランについては、遺構の特殊性とその後の活用に資するため、また遺構・遺物の考古学的価値を決定づけるものでもあることから、技師係長片岡・主査柏原を中心として全職員による検討を行ない、技師間の統一見解とした。

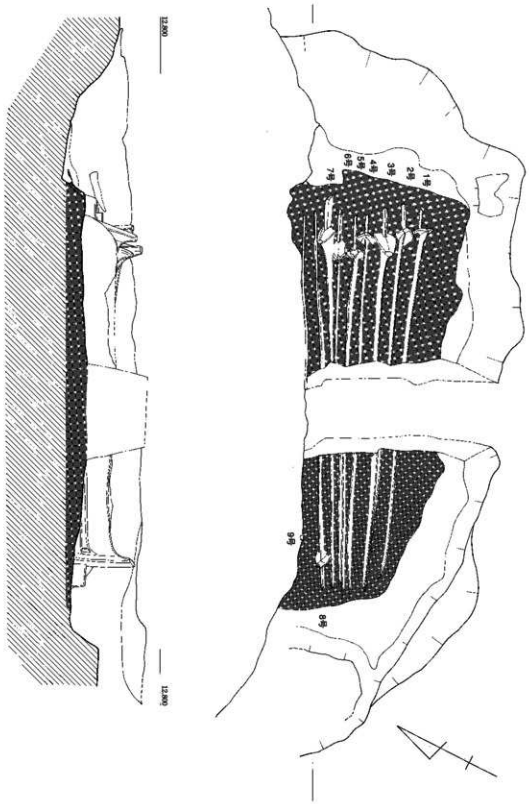
平面プランについては、遺構の掘り込み面と埋土はほぼ同色の黄褐色粘質土であり、上面には複数の根撹乱が点在していたが、詳細な精査により土質の異なるラインを見出し、楕円形状のプランとその内側に隅丸長方形の別埋土を検出した（写真5）。SK03に切られた部分では、9号銅戈の周辺部分は遺物の破損を防ぐため検出当初の状態を維持し壁面精査は保留したが、その両脇部分の精査と土層観察から、遺物を囲むように垂直に近い直線的な黒褐色土の立ち上がりが見られ、その外側に裏込め土と思われる黄褐色粘質土を検出した（写真6）。そこで、埋納作法として福岡県うきは市浮羽町日永遺跡で確認されているような「木箱埋納」を想定した。木箱ラインを捉えつつ埋土の状況も記録するために遺構短軸に沿ってベルトを設定し、埋納土坑の埋土を均一に掘り下げていくこととなった。SK03との切り合い部分については、遺物の保護と遺構を縦断する土層観察ベルトの必要性から一定幅を残しての掘削とし、記録をとった後取り外す予定とした。

埋納遺構内の銅戈については、検出初期から鋒の向きが2通りあること、平面上で検出した3本分の胡にはそれぞれ2cm程度の間隔があることから、総数を7本以上と想定していた。これは佐賀県三養基郡みやき町検見谷遺跡で確認されている、青銅器の先端と基部を互い違いに並べて埋納したいわゆる「うちちがえ」の状況を考えていたためである。この埋納遺構においては「3本の胡の間にそれぞれ9号銅戈と胡の向きを同じくする銅戈が埋置されている」という想定をした。遺物の総数については土坑全体の掘り下げの中で随時確認を行なう方針とし、SK03との切り合い部分に残す縦断ベルト内については横断ベルトの東際に断割を入れて確認することとした。なお、遺構からの遺物の取り上げについては、調査と並行して小郡市文化財専門委員会を中心に検討が行なわれた。遺物の脆弱性と希少性、また遺跡そのものも視野に入れた埋納遺構の今後の保存・活用方針と、そのために必要な情報収集のために最も適切な処置を検討した結果、現地調査においては遺物総数を確認するにとどめ、その後遺構ごと現地から切り離し作業を行ない、室内の安定した環境において遺物の補強・取り上げ作業および埋納土坑内の詳細調査を実施することとなった。露出した遺物は非常にもろく、各銅戈の形状が明瞭になるまで間隙の土を除去することは不可能であった。現地で土坑の掘削を行なっていた時点では遺物の取り上げ方法については未定であり、前述のような状況があったため土坑内の黒褐色土の掘削は銅戈の上部が3～6cm露呈する程度にとどめている。また露出部分については、検出状況の写真撮影を実施した後、NAD－10を塗布して仮強化を行なった。

埋納土坑の上面は掘り込み面の土と類似するしまりの良い黄褐色粘質土で覆われており、その厚さは遺物直上では薄く、土坑壁面に近づくに従って厚くなる傾向が見られた。横断面上では丁度黒褐色土が銅戈を取り巻いてドーム状に立ち上がるようなラインが認められ、当初想定した「木箱埋納」は蓋部分の腐食による崩落の可能性は残るものの、積極的に肯定しづらい状況となった。黄褐色粘質土の下層には、SK03 との切り合い部分で確認した黒褐色土の堆積が見られ、この黒褐色土は平面では銅戈の周辺を取り囲むような不整長方形のプランを示した。黒褐色土のプランは、土坑の平面プランとは関連しない独自の広がりであり、この埋土が遺物の周辺を取り巻いている状況から、木箱ではなく袋状のものを用いて銅戈を保護し、土坑内に埋置する手法を埋納作法として新たに想定した。但しこの手法については、現地での詳細な検討は行なえておらず、また植物・皮革の繊維痕といった状況証拠も認められなかったことから、想定のままで現地調査を終えている。

土坑内の黒褐色土は粘土を含み比較的しまりが良く、掘削時には小さなブロック状を呈した。この埋土掘削を開始した時点で既に銅戈は非常に脆弱な状態であり、各銅戈間の黒褐色土については竹串・筆・ピンセット等を駆使して除去したが、道具類が遺物に触れるだけで土中から現れたばかりの端部が破損するという状況であった。破損した青銅器片については、破片が属すると思われる銅戈の番号を控えて分別し、その都度埋蔵文化財調査センターまで持ち帰っている。

銅戈埋納遺構の検出から1ヶ月弱が経過した7月1日、ようやく遺構と遺物の全容が確認できた。土坑の形状は平面プランが不整長方形を呈し、長軸60×短軸残存長18cm、深さ12～15cmを測る。主軸は東西方向からやや北にふる。残存する銅戈の総数は9口で、北側2口は胡を南西に、南側7口は胡を北東にして埋置されている。SK03の壁面にぴったりと沿う形で9号銅戈が露出していることと、胡を向



第23図　銅戈埋納遺構図（調査地での状況、S＝1/4）

ける方向が2方向でありながらその本数に著しく差があることから、埋納行為を行なった当時はこれ以上の数の銅戈が存在した可能性がある。

遺構本体は7月25～27日の3日間にわたって切り取り作業を実施した。切り取りの範囲は、埋納遺構を中心とした長軸108cm×短軸54cm×高さ30cmと設定し、脆弱な遺物を保護するためトンネル工法により反転せず正位のままで行なっている。まず切り取り土壌の周辺に幅・深さとも1m程度の溝を掘削し、設置部分を遺構下部のみとしておく。上面が露出していた銅戈にはNAD‐10を塗布して乾燥させた後さらに緩衝材を密着させ、銅戈間および掘削した遺構内にはきめの細かい黒色土を充填した。切り取り土壌の養生としては、コーナー部を中心に複数の緩衝材を密着させて補強を行なっている。遺構本体の上位・横位に発泡ウレタンを充填した後、下位もハンドオーガーによって開削して鋼管を通した上で発泡ウレタンを流し込み、その他の各所も掘削・縁切りを行なって、遺構と周辺土壌が完全に現地から切り離され、発泡ウレタンで梱包された状態を作った。最後に周辺にめぐらせた鋼管と切り取り土壌下位に設置した鋼管を固定して搬出した。その後、室内の安定した環境下において遺物の取り上げ・埋納遺構内の詳細調査が実施されている。

遺構の切り取り作業の詳細や室内作業における成果については、平成17年度に刊行した概報において概要を示している他、平成19年度に別途報告書を刊行する予定のため、そちらを参照願いたい。

(iii) 現地調査における誤認と遺物取り上げ調査による成果概要

遺物取り上げ作業と埋納遺構内部調査については前述の概報に掲載されているが、ここでは現地調査における見解の検証のため、成果の概略を簡単に紹介しておく。

まず現地調査においてSK03との切り合い部分で想定した断面については、「木箱埋納」の根拠とした黄褐色粘質の裏込め土はSK03埋土の掘り残しと掘り込み面の汚れであったことが明らかとなった。また遺物取り上げの際、全ての銅戈において援は土坑底面と接し、胡部分が地山に差し込まれている状況が確認され、「木箱埋納」は否定されている。袋状のものを用いた埋納についても、胡の差し込みが普遍的に見受けられることから併せて否定される。胡以外の部分を布等で包んだ可能性についても、銅戈間の土層状況や顕微鏡観察の結果から否定されている。

この援・胡の設置状況から、銅戈本体は直接土中に埋納されたと判断されており、また土坑底面に今回検出された土坑とは異なる向きの掘り込み痕跡があったこと、銅戈間埋土から掘削時の破損ではない青銅器片が検出されていることから、同位置での複数回埋納が実施されていた可能性が高いことも判明した。なおそれぞれの銅戈については1～3号銅戈において固定のために粘土の設置を行なっている他、銅戈間には丁寧に土を埋め込んでおり、黒褐色土もその上面の黄褐色粘質土も複数の堆積を示す丁寧な埋設であることが明らかになっている。

＊山崎頼人2006「銅戈取り上げ・遺構内部調査」『寺福童遺跡、4　発掘調査概報』小郡市教育委員会に拠る。

(iv) 銅戈埋納遺構レプリカ作成

1）概要

遺構・遺物検出状態の現状記録と展示公開・活用のため、寺福童遺跡４銅戈埋納遺構の出土状況のレプリカ製作を行った（複製製作：株式会社京都科学）。なお、出土状況の複製は緊急性を要するため、複製製作事業を２区分して行っている。緊急性の高い現場での型取り・成形（型の劣化・損傷も考慮し、成形までを1つの区切りとしている）までを第一段階（平成16年度）、仕上げ・彩色・展示ケース製作を第２段階（平成17年度）としている。なお、第２段階については平成17年度埋蔵文化財保存活用整備事業（国庫補助）の採択を受け、進めた。以下に製作工程等を簡単に紹介しておく。

2）製作基本方針

レプリカ製作作業は、以下の方針のもと、行われた。

Ⅰ．現場遺構より型取りおよび樹脂成形を行うことで、遺構の持つ形状情報を再現する。ただし、型取時に少しでも遺構および遺物に危険のおよぶ可能性がある場合は、厳密な型取りは回避する。

Ⅱ．樹脂成形品に彩色し、原資料のもつ質感および情報を再現する。

Ⅲ．形状や質感のみならず、学術的情報にも留意する。現場での測図は、往々にして実測者によって個人差が多く表出するという問題があり、また、考古学の将来の発展に伴う問題意識の変化にも資する遺構情報を保存する必要がある。

Ⅳ．展示用化粧台とアクリル製カバーからなる展示ケースと説明板を作成し、複製の持つ情報が見学者にわかりやすく伝わるようにする。

3）製作工程

Ⅰ．着手前準備

着手に先立ち、遺構の現状を精査し、全方向より詳細な写真記録をとった。同時に、彩色の色サンプルをとった。協議の結果、銅戈については型取時の安全性を最優先し、脱型作業の効率化のため、各銅戈間の深部の厳密な型取は回避することにした。

Ⅱ．型取り

（1）資料保護

出土遺物に直接型取り材料が触れないよう、錫箔を用いて表面全体を養生した。また、型の抜け勾配を確保するため、部分的に和紙や粘土での詰物養生も行った。

（2）内型（シリコン樹脂製）製作

シリコン樹脂を塗布した。この上に、補強材としてガーゼをシリコン樹脂とともに貼りこんだ。内型が適当な厚みになるまで、以上の工程を繰り返した。

（3）外型（石膏）製作

シリコン樹脂の硬化後、その上に石膏を塗布した。石膏には麻繊維を混入して十分な強度を確保した。

写真7　錫箔による銅戈養生

写真8　内型（シリコン樹脂製）製作

（4）補強枠組付け

石膏の硬化後、型の変形を防止するため角材を用いて補強枠を組み付けた。この補強枠を利用して、型の水平基準を出しておいた。

（5）脱型

外型、内型の順に遺構面より外した。出土遺物にストレスを与えないよう、十分注意して行った。このとき、遺構表土はわずかに剥ぎ取られてシリコン型に転写される。

Ⅲ．成形

（1）成形生地製作

内型の上に成形樹脂を塗布する。この上にガラスマットを成形樹脂とともに貼りこんだ。成形品が適当な厚みになるまで、以上の工程を繰り返した。

（2）補強枠組み付け

成形樹脂の硬化後、成形生地の変形を防止するため、角材を用いて補強枠を組み付けた。この補強枠で水平基準を出して、遺構の傾斜を再現した。剥ぎ取られた遺構表土は成形生地に転写された。

Ⅳ．補刻

厳密な型取りを回避して、形状の明白でない部分を写真や図面等の資料をもとに詳細に造形し、再現した。

Ⅴ．彩色

（1）彩色材料

塗料は実物資料の材質感により塗料を使い分ける。展示環境を考慮した接着性・耐光性・耐水性にもっとも優れた彩色材料を選択する。

（2）下地処理

成形生地をシンナー洗浄して油分除去後、プライマー塗布を行い、塗料の接着性を良くする。

（3）彩色

出土遺物（銅戈）部分や補刻造形部分等、表面が成形樹脂のまま露出している部分は、写真資料や色サンプルをもとにアクリル塗料で詳細に彩色を行った。また、遺構表面で剥ぎ取りが弱く成形樹脂が露出している部分には、現場から採取した土を成形樹脂で貼り付け、周囲と違和感のないよう調整した。

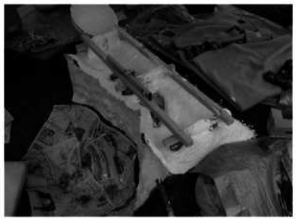


写真9　外型（石膏）製作

写真10　脱型作業状況

写真11　彩色前の協議

(v) 地雷探査機による探査確認

1）探査確認にいたる経緯

寺福童遺跡4では、銅戈埋納遺構という希少性の高い遺構が検出されている。複数の青銅器埋納が発見された遺跡としては、島根県簸川郡斐川町神庭荒神谷遺跡が著名であるが、荒神谷遺跡においては銅剣の多量埋納遺構と銅矛・銅鐸の複数器種埋納土坑が近接した位置で検出されている。その他にも、銅鐸出土地としては静岡県引佐郡細江町、岡山県井原市が、武器形青銅器出土地としては大分県角埋山山麓、香川県我拝師山北麓等が、狭い範囲に青銅器出土地が集中する例として知られている。このように、全国的に青銅器埋納遺構は極めて限られた範囲に設置される傾向があり、特に集落域・墓域から離れた単独の埋納遺構については、地形的に関連のある箇所もしくは同一丘陵・台地上に複数存在する可能性が高いことが明らかになっている。

本遺跡は背振山系から派生する低位段丘の南東隅に位置し、これまでの周辺における発掘調査では銅戈埋納遺構と同時期の集落域は確認されていない。また調査地内においても、同時期の集落の存在を明確に示す遺構・遺物は確認されていない。つまり寺福童遺跡4で検出された埋納遺構は、当時の生活圏から離れた場所に特別に設置されたものである可能性が高いと判断される。

そこで今回の調査においては、Ⅱ区第2遺構面に別の埋納遺構が存在する可能性を考慮し、第1遺構面における遺構掘削終了後にⅡ区全面にわたる探査確認を実施した。これは前述の銅戈埋納遺構の上層埋土が遺構面と酷似した土色であり、遺構断面の露出がなければ発見は極めて困難であったと考えたためである。通常の発掘調査の手法に加え、先に発見された埋納遺構のように遺構面と類似する埋土の遺構が完全な状況で存在した場合に目視では検出できない可能性があるため、その補強措置として行うこととなった。本遺跡での探査には、陸上自衛隊小郡駐屯地に協力を依頼し、快諾を得た。

2）探査の方法

探査は平成16年8月24・25日の両日にわたって実施した。探査には地雷探査機2台を使用し、調査区の北側から南側へ順次行なった。

調査にあたっては、Ⅱ区全体に水糸を張り、任意の方位で2m四方のグリッドを設定した。このグリッドを1単位として、グリッド毎の遺構面にまんべんなく探査機を這わせ、反応があった部分については、その想定形状を反映した目印をつけていくこととした。目印については、並行して実施していた調査やその後の目印近辺および下部の遺構掘削に支障をきたさず、埋納遺構が存在した場合にも遺構を損なわないこと、降雨等に影響を受けにくいこと、入手および取り扱いが容易であることなどを考慮し、粉末石灰を使用した。対象となる範囲全体の探査が終了したのち、目印は全て1/100の平板測量で記録し、その後の通常の発掘調査における遺構、遺物検出時に随時確認を行なっている。

なお、今回使用された地雷探査機は、対象とする物質の密度差に反応するタイプのものであり、撹乱内遺物・包含遺物・礫等、種類を問わず土中の遺物全てに反応を示すこと、また遺構面と埋土のような土質の差にも反応することなどについての説明を事前に受けている。また探査範囲については、地雷探査機の本来の役割上、現地表面より0.5m下程度が限度であり、それより下層には及ばないことも併せて知らされた。そのため、第1遺構面である黒色土の堆積が厚いⅡ区中央部については、包含遺物に反応したと考えるのが妥当である。

写真12　地雷探査作業

第24図　探査反応箇所と実際の遺構分布状況（S=1/200）

3）探査の結果と実際の遺構分布

第24図に網掛けで示した部分が、探査によって反応を示した箇所とその形状である。範囲は大小さまざまで、かならずしも遺構の位置と一致している訳ではない。但し、多くはピット群や土坑をはじめとする何らかの遺構の上面もしくは近辺に位置しており、黒色土が堆積していなかった調査区北東部については、基盤層がロームから砂質に変化する部分に目印が残されている。遺構埋土と掘り込み面、掘り込み面内の土の粒子の状況といった土質の差に対して正確に反応を示していることがわかる。

今回は調査の都合上、未掘削・未検出の遺構や包含層の堆積が残る状況での調査となったが、目視で検出した全ての遺構の掘削後であれば、調査終了後の遺構面の破壊を伴う危険性はあるが、まだ見ぬ青銅器埋納遺構を検出する可能性は存在していると言えるだろう。

（4）調査成果のまとめ

今回の調査では、竪穴住居10軒、溝状遺構10条、土坑14基とピット群を検出した。本遺跡の調査成果の中でも、特筆すべきはⅠ区で検出した銅戈埋納遺構である。この遺構は後世の土坑に破壊されているものの、当時祭器として貴重な品であった銅戈の埋納状況とその過程を確認出来る重要な遺構であり、今後の弥生時代祭祀や精神文化を研究するにあたって、多大な資料を提示することが期待される。遺構掘削に関して、現地調査に多くの不備を残したことは深く反省する次第である。

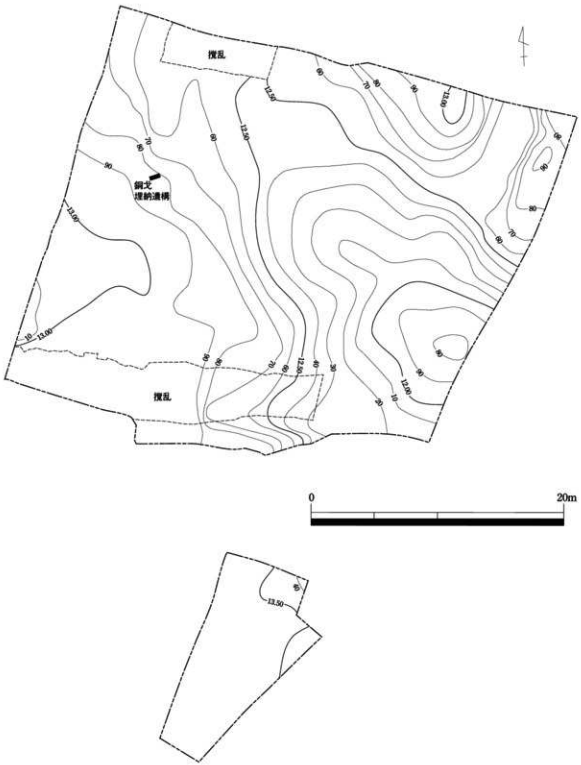
寺福童遺跡４では、竪穴住居の埋土より縄文時代の所産と見られる黒曜石製石鏃が数点出土しているが、明確に遺構の時期を決定する遺物ではなく、埋め戻しの際の混入品と考えられる。遺構に伴う遺物としては、上記の中広形銅戈が最も古い時期のものであり、遺跡地の生活空間としての利用は弥生時代中期に始まると考えられる。

本遺跡は調査区東側を中心に黒色シルトが広い面積に堆積しており、その上面（第1遺構面）の遺構検出から作業を進めている。Ⅰ区については、表土掘削段階での黒色シルト堆積に関する認識がとぼしかったため上面造成土とともに重機掘削を実施してしまっているが、調査区壁面の土層からは南西部分を除くⅠ区全体に厚みの違いはあるものの黒色シルトの堆積が認められる。この層については古墳時代中期～後期初頭の遺物を多く含むことから、この時期の堆積であると考えている。第2遺構面で検出された竪穴住居群は、黒色シルトの堆積後ほどなく構築されたと思われる。

銅戈埋納遺構が設置された弥生時代中期の地形は、黒色シルト下の褐色ローム層の面が示す状況であったと考えられる。この時期の地形を等高線で表したのが第28図である。本遺跡の周辺ではこの時期の集落の存在を明確に示す遺構は検出されておらず、近接する寺福童遺跡５において墓域が確認されているのみである。但し遺物は微量ながら諸遺跡で出土しており、本遺跡においても混入遺物として丹塗磨研土器の細片が見られることから、現在調査の手の及んでいない地点で今後集落が発見される可能性は高いと思われる。寺福童遺跡４は北から南へ延びる舌状台地の南端に位置するが、等高線の状況からは台地の南東隅に近い場所にあり、調査区を縦断するように比高差1.0ｍ前後のごく小規模な谷部が入り込んでいる状況が見て取れる。これまで調査されてきた近隣遺跡のうち、本遺跡の北約300ｍに所在する寺福童遺跡３においても、調査区東側に台地端部の崖状の落ち込みを確認しているが、この遺跡は谷部の東側にある別の小台地に位置することになり、調査で検出された崖は本遺跡で確認した谷部のさらに東の大きな地形変換点となることがわかる。また、Ⅰ・Ⅱ区から10ｍ程度南に下った位置に、地形確認のために掘削したトレンチの状況からは、この谷部は南東方向に延びるもので、遺跡のある西側の台地部分は南へ向かって標高が上がる様子がうかがえる。小規模な谷部に隣接した段丘・台地上は、この時期の集落が設置されることが多い地理的環境であり、今後本遺跡の北西部で集落域が発見される可能性は高まったと考えられる。

従来青銅器埋納遺構は、当時の生活圏ではなくむしろ「人里離れた場所」に設置されることが一般的であると考えられ、これまで全国各地で確認されてきた青銅器埋納遺構も概ねその傾向に当てはまる状況であった。しかし、本遺跡で確認した現況地形や周辺遺跡の出土遺物などからは、集落の中心地には所在しないものの、祭器を納めるのにふさわしい広大で見晴らしの良い場所でも、花立山のような遠隔地の目印が見通しやすい位置でもない。むしろ近くに生活圏のメインとなる場所が所在しており、谷部への傾斜が原因で構造物が造られない、いわばムラはずれにある「人けのないところ」といった場所に構築されているような印象を受ける。

当時の周辺環境を想定するにはまだまだ同時期の資料が不足している状況であるため、これはあくまで想像に過ぎず、詳細な検討は今後の資料の増加を待って行いたいと考える。



第25図　寺福童遺跡４　第2遺構面等高線図（S=1/300）

Ⅳ．寺福童遺跡４における自然科学分析－銅戈埋納遺構埋土の分析－

株式会社　古環境研究所

（１）はじめに－本分析の目的－

寺福童遺跡４の発掘調査では、弥生時代中期末から後期初頭の中広形銅戈９口の埋納遺構が検出された。青銅器埋納遺構は工事中の発見が多く、本例は遺構内精査が行なえた点で意義が大きく、その埋置状況が明らかになっている。埋納遺構周辺の考古学的調査からは、調査区内には同時期の遺構・遺物が見られず、銅戈は集落から離れた場所に埋納されたと考えられている。

本分析では、埋納時の周辺環境を自然科学分析から明らかにし、当時、植生から集落から離れた場所であったか否かについての是非を問いたい。

（２）試料

分析試料は、銅戈埋納遺構の2･3号銅戈間土層の銅戈を固定したと考えられる地山類似粘質土【試料６】（にぶい黄褐色粘質土＋褐灰色砂混じりシルト）、１号銅戈東土層断面より採取された検出された南側掘り込み内埋土【試料15】（黒褐色シルト＋黄褐色砂混じり粘質土）、南側掘り込み土土位の埋土【試料32】（灰黄褐色シルト＋黄褐色砂混じりシルト）の計３点である。

（３）分析法

(i) 植物珪酸体分析

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO２）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

写真13　試料採集箇所①（土層断面写真Ⅰ）

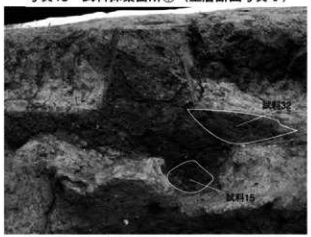


写真14　試料採集箇所②（土層断面写真Ⅱ）

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）

３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400

検出密度（単位：×100個/g）

分類群（和名・学名）＼試料		銅戈埋納遺構内土壌 6	15	32
イネ科	Gramineae (Grasses)			
ヨシ属	Phragmites		7	
ススキ属型	Miscanthus type		7	7
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	14	46	21
ウシクサ族B	Andropogoneae A type	14		
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)			
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		13	21
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	50	157	209
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	36	46	63
未分類等	Others	14	39	63
その他のイネ科	Others			
表皮毛起源	Husk hair origin	14	13	21
棒状珪酸体	Road-shaped	115	98	139
未分類等	Others	101	151	111
植物珪酸体総数	Toal	358	577	655

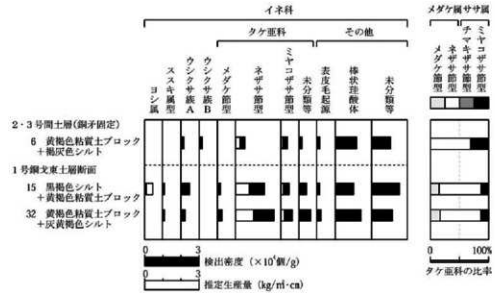
おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）

ヨシ属	Phragmites		0.41	
ススキ属型	Miscanthus type		0.08	0.09
メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		0.15	0.24
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	0.24	0.76	1.00
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	0.11	0.14	0.19

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	Pleioblastus sect. Nipponocalamus		15	17
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	69	72	70
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Crassinodi	31	13	13

第１表　銅戈埋納遺構内土壌における植物珪酸体分析結果



第26図　銅戈埋納遺構内土壌の植物珪酸体分析結果

以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10 - 5g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

(ii) 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

1）0.5%リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎する。
2）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
3）25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
4）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
5）再び氷酢酸を加えて水洗処理
6）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
7）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

（４）分析結果

(i) 植物珪酸体分析

1）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を第１表および第26図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真（写真15）を示す。なお、イネ、ムギ類、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、キビ属型（キビが含まれる）などのイネ科栽培植物に由来する植物珪酸体は検出されなかった。また、ブナ科、クスノキ科、マンサク科などの樹木に由来する植物珪酸体も検出されなかった。

〔イネ科〕　ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科 - タケ亜科〕　メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

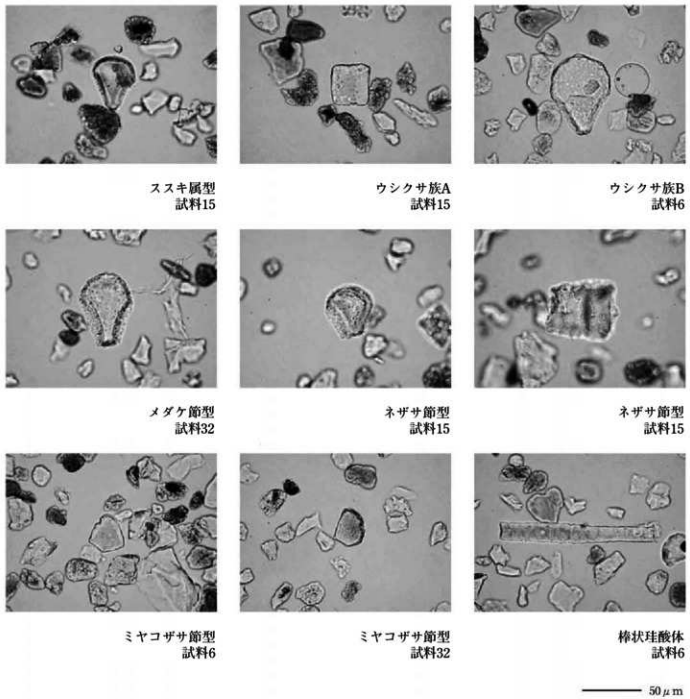


写真15　銅戈埋納遺構内土壌の植物珪酸体顕微鏡写真

〔イネ科 - その他〕　表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

2）植物珪酸体の検出状況

・2・3号銅戈間土層

銅戈を固定する粘質土（試料６）では、ウシクサ族Ａ、ウシクサ族Ｂ、ネザサ節型、ミヤコザサ節型などが検出されたが、いずれも少量である。

・１号銅戈東土層断面

埋納遺構の埋土（試料15、32）では、ネザサ節型が多く検出され、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、メダケ節型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、試料15ではヨシ属も少量検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型が優勢となっている。

分類群		１号銅戈東土層	２・３号間土層	
学名	和名	15	32	6
Arboreal pollen	樹木花粉			
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属	1	2	9
Cryptomeria japonica	スギ			1
Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科			1
Alnus	ハンノキ属		1	5
Betula	カバノキ属		1	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ		1	1
Castanea crenata	クリ			1
Fagus	ブナ属	1		
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	2		
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属	5	3	29
Distylium	イスノキ属	1		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉			
Leguminosae	マメ科		1	3
Nonarboreal pollen	草本花粉			
Gramineae	イネ科	4	5	16
Cyperaceae	カヤツリグサ科			8
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節		1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科		1	
Cruciferae	アブラナ科	1		1
Vigna	ササゲ属		1	
Impatiens	ツリフネソウ属	1	1	2
Asteroideae	キク亜科	1	2	5
Artemisia	ヨモギ属	10	24	183
Fern spore	シダ植物胞子			
Monolate type spore	単条溝胞子	1	2	3
Trilate type spore	三条溝胞子	4	1	16
Arboreal pollen	樹木花粉	9	8	48
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	1	3
Nonarboreal pollen	草本花粉	17	35	215
Total pollen	花粉総数	26	44	266
Unknown pollen	未同定花粉	1	6	3
Fern spore	シダ植物胞子	5	3	19
Helminth eggs	寄生虫卵	(−)	(−)	(−)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(−)	(−)	(−)

第2表　銅戈埋納遺構内土壌の花粉分析結果

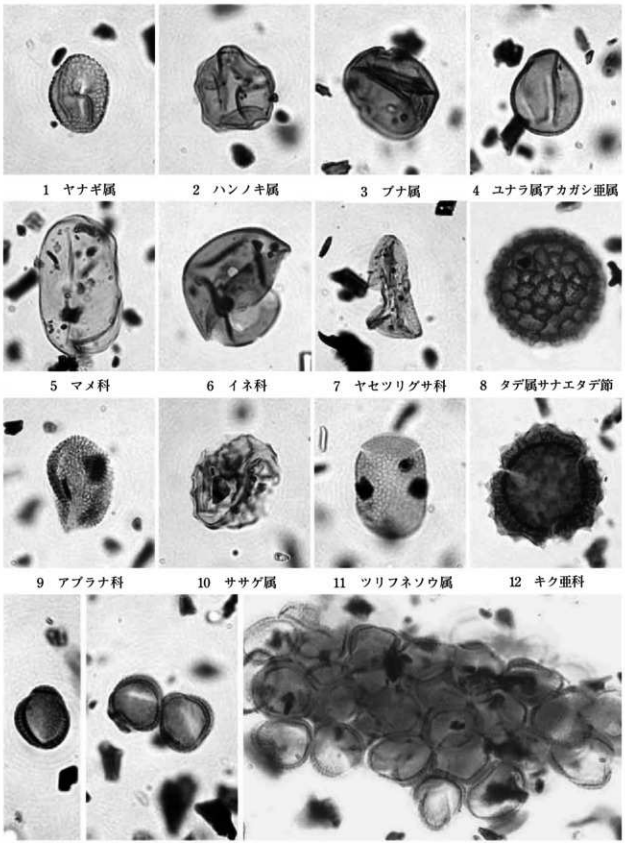
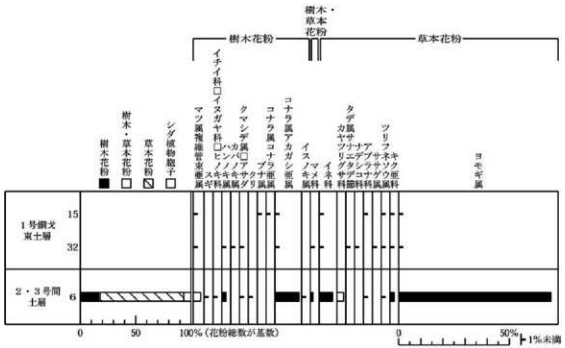


写真16　銅戈埋納遺構内土壌の花粉顕微鏡写真



第27図　銅戈埋納遺構内土壌の花粉ダイアグラム

(ii) 花粉分析

1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの１、草本花粉９、シダ植物胞子２形態の計23である。これらの学名と和名および粒数を表２に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の農耕・植生を復元するために花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを第27図に示す。主要な分類群は写真16に示した。また、寄生虫卵についても観察したが検出されなかった。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕　マツ属複維管束亜属、スギ、イチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属・アサダ、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕　マメ科

〔草本花粉〕　イネ科、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、ナデシコ科、アブラナ科、ササゲ属、ツリフネソウ属、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕　単条溝胞子、三条溝胞子

2）花粉群集の特徴

・２・３号間土層（試料６）

樹木花粉より草本花粉の占める割合が非常に高い。草本花粉のヨモギ属が卓越し、イネ科、カヤツリグサ科、キク亜科などが伴われる。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属などが検出された。

・１号銅戈東土層（試料15、試料32）

試料15、32はそれぞれ花粉密度が非常に低く、樹木花粉のマツ属複維管束亜属、コナラ属アカガシ亜属、草本花粉のイネ科、ヨモギ属などがわずかに検出された。明らかな栽培植物としてササゲ属が検出された。

（5）考察

1）１号銅戈東土層（試料15、試料32）

弥生時代中期末とされる銅戈埋納遺構内の埋土の堆積当時は、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属、ササ属（ミヤコザサ節）なども生育するイネ科植生であったと考えられ、日当たりの良い比較的乾燥した環境であったと推定される。また、花粉密度が非常に低いことから、花粉分析からも周辺は花粉の分解される排水のよい乾燥した堆積環境が推定される。草本ではヨモギ属、イネ科、樹木ではコナラ属アカガシ亜属、マツ属複維管束亜属の分布が考えられる。ササゲ属（アズキなど）の栽培が認められる。なお、少量ながらヨシ属が認められることから、周辺にはヨシ属などが生育する湿地的なところも分布していたと考えられる。

2）２・３号間土層（試料６）

銅戈を固定する粘質土の堆積当時は、メダケ属（ネザサ節）やササ属（ミヤコザサ節）などは見られるものの、何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと考えられる。近傍にはヨモギ属を主にイネ科、カヤツリグサ科、キク亜科の草本が繁茂しており、排水のよいやや乾燥した環境が示唆される。周辺にはコナラ属アカガシ亜属（カシ類）の照葉樹を主に、マツ属複維管束亜属、ハンノキ属などの樹木が分布していたと推定される。

（6）まとめ

寺福童遺跡４の１号銅戈東土層および２・３号間土層について植物珪酸体分析と花粉分析を行った。その結果、銅戈埋納遺構内の埋土の堆積当時は、日当たりが良く、排水のよい乾燥した堆積環境が示唆された。近傍は乾燥を好むヨモギ属を主とする草本が分布しており、メダケ属（おもにネザサ節）を主体としてススキ属やチガヤ属、ササ属（ミヤコザサ節）なども生育するイネ科植生であった。周辺にはコナラ属アカガシ亜属（カシ類）を主とする樹木の分布が推定された。栽培植物のササゲ属（アズキなど）の畑作が示唆された。

なお、今回の分析調査では、銅戈埋納の際に利用されたイネ（藁製品・籾殻）などの植物の検出が期待されたが、これを示唆するような結果は得られなかった。

【註】

(1)（2）は山崎が一定の除加筆を行った。

【文　献】

金原正明1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店p.248-262.
島倉巳三郎1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集』p.60
杉山真二1987「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告31』p.70-83.
杉山真二1999「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究38(2)』p.109-123.
杉山真二2000「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社p.189-213.
中村　純1973『花粉分析』古今書院p.82-110.
中村　純1974「イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究13』p.187-193.
中村　純1977「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学第10号』p.21-30.
中村　純1980「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録第13集』p.91
藤原宏志1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)・数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法・」『考古学と自然科学9』p.15-29

Ⅴ．調査成果の検討

（1）寺福童の遺跡分布から見た変遷

寺福童遺跡４においては、弥生時代中期～後期の銅戈埋納遺構をはじめ、近世に至るまでの遺構・遺物を確認している。個別の遺構・遺物の詳細についてはⅢ章において報告しているので、ここでは遺跡全体の歴史的変遷と周辺の既調査区との関連についてまとめ、本遺跡地の歴史的様相を概観したい。

なお、周辺の調査遺跡は弥生時代を第29・30図、古墳時代以降を第31・32図に示している。現在の地形、および発掘調査によって明確になった台地端部の崖状落ち込みをもとに、本遺跡の所在する台地の地形変換ラインを想定した。このラインは現状での推定ラインであり、今後の調査によってさらに詳細な地形復元が可能になるものと考える。

＜弥生時代の状況＞

寺福童遺跡４における生活空間としての利用は、銅戈埋納遺構が掘削された弥生時代中期に始まると考えられる。しかし、遺跡の所在する台地上の南部では弥生時代の集落遺構は一切確認されていない。本遺跡と同年に発掘調査を実施した寺福童遺跡５は、一部時期を同じくする弥生時代の墓域であるが、ここで示した地図の範囲には所在せず、さらに北西部分に位置することになる。寺福童遺跡５では、前期の木棺墓を伴う中期の甕棺墓群が確認されており、本遺跡では同時期と想定した石蓋土壙墓・木棺墓を各1基検出しているが、物理的な距離から異なる墓域を構成するものと思われる。この他、県道小郡久留米線（現・市道中町寺福童208号線）工事の際にも甕棺を検出した例があるが、これも本遺跡よりはるかに北側に位置している。

寺福童遺跡４の所在する台地は砂礫台地の先端であり、南の沖積低地に向かって傾斜するとはいえ、その角度は極めて緩やかである。谷部との比高差は南へ行くほど小さくなり、第29・30図に示した台地ラインの先端となる寺福童七斗前遺跡の位置はほぼ平地の状況である。台地の東側には北から南へ流れて宝満川へ合流する築地川が、西側には柿添池から派生して南へ延び、築地川と合流する流路が流れており、これらが氾濫した際には台地の南部もある程度水につかっていた状況が想定される。このような地形的な制約から、弥生時代の集落・墓域は台地北部に分布しており、本遺跡の所在する南部は日常生活圏として本格的には使用されていなかったと考えられる。

但しⅢ章（３）にて報告したように、寺福童遺跡４では混入遺物として当該期の丹塗磨研土器の細片を確認しており、他遺跡でも極微量ではあるが弥生時代中期の遺物が散見される。多分に想像を含むが、祭祀遺構が存在していた可能性は皆無とは言えない。本遺跡において銅戈埋納遺構が検出されたこともあり、台地南部は日常生活に使用される場ではなく、「ムラはずれの人けのない場所」であったと思われる。あるいは、今後周辺部の調査によって集落・墓域を構成する同時期の遺構が確認されれば、ムラはずれではなく集落内の空閑地であると判断出来るかもしれない。

このような場所で何故マツリに関する遺物の出土が認められるのか、今後祭祀土坑の遺跡内における所在位置や、集落内での祭祀痕跡等を詳細に分析する必要があると考えられる。

＜古墳時代の状況＞

古墳時代初頭には、東の谷部を隔てた台地上にある福童町遺跡１でまとまった量の外来系土器を伴う溝が、また西側では谷部を隔ててやや距離があるものの、大崎小園遺跡で同様に外来系土器を伴う住居が検出されており、外部との交流を伺わせる集落がこの台地周辺で散見されるようになる。この時期の遺跡分布状況を示したのが、第31・32図である。

本遺跡地の北に隣接する寺福童遺跡３においても、住居こそ認められないものの、古式土師器の埋納ピットが確認されており、周辺に同時期の集落の存在を伺わせる。寺福童遺跡４の所在する台地上では、寺福童遺跡１に古墳時代初頭の外来系時を伴う方形周溝墓が4基検出されており、まず墓域としてのスタートが確認されている。この墓域は台地の南端に位置し、福童町遺跡1・大崎小園遺跡ともに見渡せる立地条件にある。古墳時代以降、集落と墓域はその位置を明確に区別して営まれるようになることから、寺福童遺跡１と上記の双方の集落との関連もしくは影響を考える上で興味深い。またこの遺跡では前期の方形周溝墓と切り合う形でそれ以降も土壙墓が構築されており、古墳時代の一定期間を通じて墓域として機能していたことが明らかとなっている。

寺福童遺跡４では、弥生時代後期中葉から古墳時代前期末までは遺構・遺物の存在が断絶し、生活痕跡が再び看取できるのは古墳時代中期末からとなる。1号竪穴住居の構築が集落としてのスタートで、この台地南部では現在のところ最も古い集落である。中期末の集落が開始する前に、弥生時代中期の銅戈埋納遺構が面していた小規模な谷部は埋没もしくは造成されており、この時期には比較的安定した地盤となっていたようである。但し開始当初の住居は黒色シルトの薄い部分に1軒確認されているのみで、集落全体の中心部はやはり調査区北西の旧来の基盤層上に営まれた可能性が高い。その後、後期に入ると徐々に住居を構築する範囲が東へ拡大し、土坑を伴って、一般的な集落の構成要素が出揃うようになる。

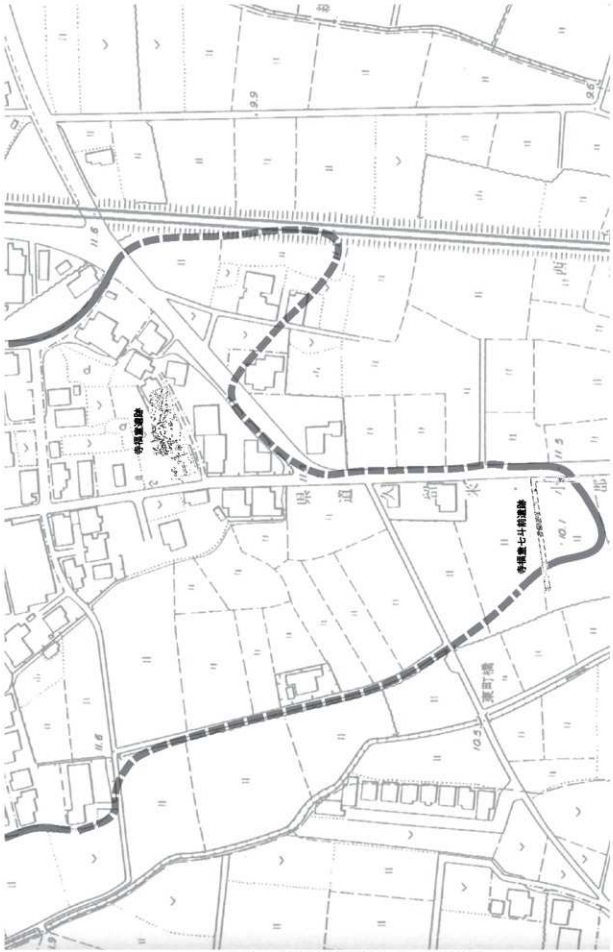
調査区内で検出した住居は10軒だが、遺物の内容と主軸方向から大まかに2期に区分出来るが、ほぼ同時代のもので構築時のまとまりを示す程度であると思われる。調査区南西隅のSC02と北東部のSC06・09・10の4軒がやや古い時期のものであり、その後中央北端のSC07・08と南西のSC03～05の5軒が構築される。もともと谷部であった位置に竪穴住居を構築したものの、何らかの不備が生じて従来の基盤層に近い位置へ移動したとも想像出来る。いずれの竪穴住居群も同位置で複数回の立替を行なっており、なおかつ主軸の方向は一致させている。

またSD05はその位置から、一見新しい段階の住居構築域の東限を示すようにも思われるが、出土遺物からこれより新しい時期の遺構と考えるべきであろう。本遺跡では集落の区画や境界を示すための施設は確認されておらず、今回調査区内は地形の状況から集落の東端であることは推測されるが、その他の3方向には集落域が延長するものと考えられる。これを裏付けるように、本遺跡の北に位置する寺福童遺跡３でも同時期の竪穴住居を検出しており、台地の東端に沿って竪穴住居が点在する集落の存在を示している。以上のように、寺福童遺跡４は古墳時代後期をピークとする台地南部に展開した集落の一部で、南東隅部分もしくはそれに近い位置に相当すると思われる。

この集落と並行して存在する墓域は、寺福童内畑下道東遺跡で確認されている。調査面積の関係か、わずかな基数の検出にとどまるが、寺福童遺跡４の集落がピークを迎える6世紀後半代の土壙墓が認められる。寺福童遺跡４からは直線距離で100m弱であり、ここが対応する墓域であると判断出来る。ところでこの他にも、寺福童内畑下道東遺跡では土壙墓に切られている東西方向の溝が検出されている。この溝は出土遺物からの時期決定が出来ない状況であるが、古墳時代中期以前の所産と考えられ、寺福童遺跡１が墓域として機能していた時期とほぼ一致する。寺福童１～寺福童内畑下道東間も直線距離にして約100mであり、古墳時代前～中期の集落中心部の所在は不明であるものの、集落と墓域の境界となる溝の可能性も考えられる。

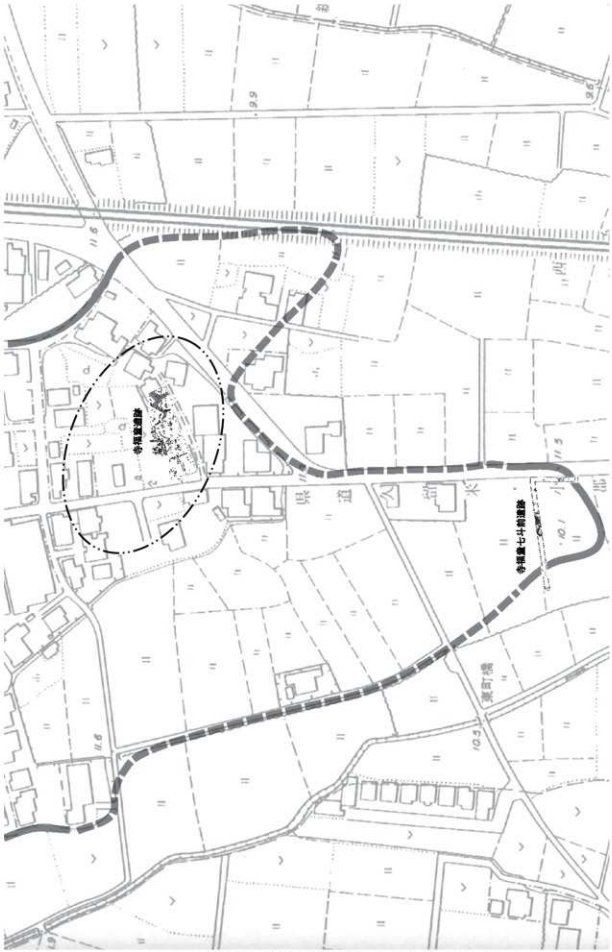
またこれらの状況から、弥生時代は台地北部に展開した（集落・）墓域が、古墳時代前期には周辺の影響によるものか大幅に南下し、それが「墓地は南、集落はその北」という位置関係を保ちながら、再び段階を経て徐々に北東部に上昇して移転していく様子が認められる。

第28図　寺福童周辺遺跡分布（1）（S=1/2000）



第29図　寺福童周辺遺跡分布（2）（S=1/2000）

第30図　寺福童周辺遺跡分布（3）（S=1/2000）



第31図　寺福童周辺遺跡分布（4）（S=1/2000）

＜古代の状況＞

市内遺跡においては、上岩田遺跡・小郡官衙遺跡といった古代官衙関連遺跡を除くと、干潟城山遺跡等極めて少数の遺跡においてのみ集落域・墓域が確認されている状況であり、市域の多くではこの時期の生活圏の様相は不明瞭である。

本遺跡地においても少量の遺物は出土しているが、この時期の遺構の多くは後世の造成により消滅していると考えられる。但し、銅戈埋納遺構を破壊して掘削されている3号土坑については、埋土の色調や含有物が他遺跡の古代の遺構と近似していることから、この時期の廃棄遺構と判断した。寺福童遺跡４が所在する台地南部では、調査区の北側にある寺福童遺跡３と、南側にある寺福童内畑下道東遺跡で、それぞれ2×2間の掘立柱建物が確認されている。この時期に入ると、台地上の集落は南北に二分されていたと考えられる。集落規模や竪穴住居の継続等については不明であるが、今後近接地の調査が進展すれば徐々に明らかにされていくだろう。

古墳時代以降の状況から推測するに、古代官衙関連遺跡の登場とほぼ時期を同じくして集落の再編が行なわれたようである。弥生時代から古墳時代へといたる変遷の中で、それぞれの集落は拡大・収縮、分散・吸収を経て、ある程度の繋がりを保っていくようであるが、この時期に入るとそれが断絶し、前段階までの流れを汲む集落の存在が極めて稀となる。これは当時の政治・政策との関連に由来するものと考えられ、農地確保や官道整備、官衙設置のためなどによる集落の移転が想像される。現在の国道500号線とほぼ並走する東西官道の調査事例の中では、官道設置によって廃絶し、近接地への移転が想定されている集落も見られる。

本遺跡の所在地は筑後平野を東西に横断する官道と、筑後・肥前国境に当たる西海道肥前路からそれぞれ約1km程度の位置にあり、現状では痕跡が確認出来ないものの、かつては条里跡も認められた場所である。当時農耕に従事した人びとの集落がこの地域に存在する可能性は高く、今後の調査に期待したいと考える。

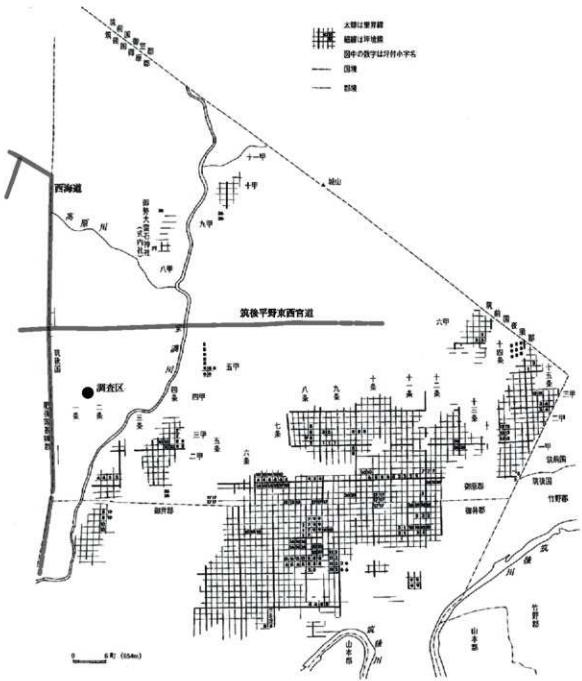
＜中・近世の状況＞

中世の寺福童は『太平記』に描かれた「大保原合戦」の舞台として登場する。文中元年（1372）に今川了俊に圧されて大宰府から退いた南朝側が、文中三年（1372）に復帰を目指して陣を敷いたとされるのが寺福童・福童に広がる福童原で、本遺跡が所在する台地南端には現在石碑が残っている。

しかしこのような状態は長い歴史の中の一事件に過ぎず、中・近世の寺福童・福童区は文献資料から在地の農村であったことが明らかとなっており、これまでの発掘調査においてもこれを裏付ける資料が出土している。特に近世代については、『豆田井手水論記録』に水利権を激しく争わなければならない、厳しい農業事情が描かれている。本遺跡地の北東・北西に点在する溜池のうちの一部も、この時期から農業用水確保のため構築・維持されていたことがわかる。

遺跡の所在する台地上では、後世の造成により大幅な削平を受けているためか、中・近世の遺構・遺物の確認例は微少である。寺福童遺跡２において台地縁辺の等高線と並行する溝が2条検出されている他は、わずかに陶磁器の出土が見られるのみである。

本遺跡で検出した中世の遺構は土坑、近世の遺構は溝に限定される。位置は北東部のやや高まった台地の縁辺部に多く、南にはほとんど認められない。また調査区全域でピット群が確認されているが、掘立柱建物を構成するグループは確認できず、集落全体の様相を復原する資料とは成り難い。土坑・溝ともに残りは非常に悪く、当時の集落域には盛土等の造成事業が実施されていた可能性も考えられる。中世土坑は日用品の廃棄に使用されており、この時期の井戸等は確認していない。近世溝については流水の痕跡が見られるものの、方位は正方向ではなく屈曲や交差、畦状の痕跡も認められない。この溝は明治初期の地籍図には掲載されておらず、規模も比較的小型であることから、田畑への水利



第32図　筑後国御原郡・御井郡条里地割（小郡市史第1巻第78図に加筆）

に関連した溝ではなく、集落の一部あるいは個人の土地区画といった簡便な用途を果たすものと思われる。

対して西側の谷を隔てた肥前国寄りの地域や、台地より南の低地部分では、灌漑技術の進展等によりこの時期から土地利用が活発になるようである。福童東内畑遺跡のように、近世集落の様相を示す遺構・遺物が見られる遺跡も調査されている。これまでの市内の近世遺跡といえば、街道沿いの松崎宿周辺が中心であったが、今後は市域南西部をはじめとする農村集落の調査にも着目していく必要があるだろう。

＜その他の遺構＞

これまで延べてきたもの以外に、寺福童遺跡３～寺福童遺跡４～寺福童遺跡１の流れで落とし穴状遺構が確認されている。各遺跡間に距離があり、必ずしも列状の並びが確認出来る訳ではないが、寺福童遺跡３・４は台地の東端、寺福童遺跡１は南端に位置しており、傾斜部分に走る獣道に沿って構築された可能性が考えられる。

これまで追ってきた集落・墓域の変遷を眺めると、調査事例の数によるものもあるだろうが、台地西部では全く遺構が認められない状況に気付くだろう。寺福童遺跡２では近世以降の溝状遺構が2条確認されているだけで、東部の集落・墓域との関連を同わせる遺構・遺物は皆無に等しい。

寺福童遺跡４の所在する台地の西側は、谷部に降りてすぐの位置から現在の西福童区となる。この地区は近年道路改良工事に伴ってさかんに発掘調査が実施され、多くの資料が出土している場所である。しかし文献資料から見られる範囲では近世前半、調査成果から推測される範囲ではそれよりもかなり以前から、たびたび水害に悩まされてきた地区でもある。当然のことながら集落形成に適した微高地の範囲も狭く、何より集落に居住した人びとの口を養うための生産性も低い状況であったと想像出来る。自然流路や河川の水流を広範囲の農業生産へ活用する技術が一般的に確立されるまでは、段丘や台地間の谷部は水田耕作適正地として近接集落の生産域となる傾向が長く認められる。集落およびそれと一連の関係を持つ墓域の形成は、地理的な制約はもちろんのことであるが、生産域の確保についても同様に規制されるのかもしれない。

本遺跡の調査は、発掘調査開始からほどなく銅戈埋納遺構が確認され、遺跡全体の調査はこの埋納遺構を中心に実施することとなった。その結果として、他遺構の調査については遺物出土状況や遺構の性格決定、他遺跡との関係性の検討など、現地調査において分析不良の部分を多く残している。埋蔵文化財の調査とは遺跡の破壊にほかならず、1度掘削した遺構は二度と元には戻らない。この調査における反省を、今後の調査における大きな課題としたい。

（２）銅戈埋納遺構の特質ー他の埋納例との比較からー

寺福童遺跡４で検出した銅戈埋納遺構は、青銅器が多量埋納された状況を検出し、その埋納方法を発掘調査の手法を用いて捉えることができた点で特筆に価する。ここでは、既往の埋納例との比較から、寺福童例の特質の描出を試みる。

(i) 寺福童例の概要

まず、寺福童例の概要を確認しておく(小郡市教育委員会2006)。

・長軸約60cm・短軸約18cm以上・検出面からの深さ12～15㎝の不整長方形で、西側を後世の土坑に切られる。

・南側底面に人為的な掘り込みがあって青銅器の破片を含み、埋納土坑内に先後関係が存在する可能性がある。

・計9本の中広形銅戈が、東側の7本が鋒を南西に、西側の2本が北東に向けて埋納されており、本来は西側により多くの銅戈が埋納されていた可能性がある。

・1～3号銅戈・4～7号銅戈・8～9号銅戈が各1単位のまとまりとして認められ、単位間には若干広めの隙間がある。銅戈は援を地山に接し、胡を地山に差し込んでおり、埋納のための容器を想定することは困難である。また、1～3号銅戈は粘土で固定された形跡がある。

(ii) 北部九州（壱岐・対馬を除く）における他の埋納例

九州の埋納青銅器については、戸塚洋輔氏の集成がある（戸塚2002）。本節ではこれを基に、北部九州の青銅器埋納遺構について、寺福童例と比較していく。なお、紙幅の関係上、比較対象を北部九州の中でも九州本島部に限ることを了解されたい。

１.発掘調査によって出土したもの

いずれも集落内埋納で、1～2本と少ない。

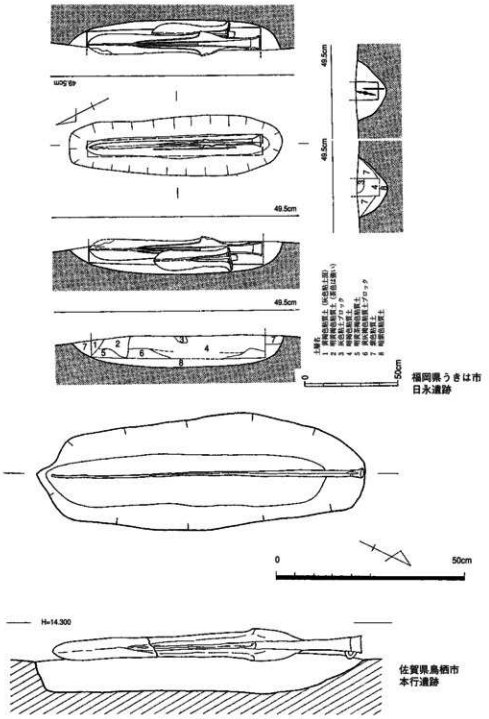
１）福岡県うきは市浮羽日永遺跡（福岡県教委1993・1994、佐々木1997）

長軸109cm・短軸30cm・検出面からの深さ16cmで、長楕円形を呈する。広形銅矛と広形銅戈を一口ずつ、「鋒そろえ」[1]で埋納する。土層断面から、長軸89cm・幅9cm・深さ12cm以上の木箱に納められ、木箱と遺構壁面の間には暗紫色粘質土を充填し、木箱内では銅戈に対して黄灰褐色粘質土で支え状の措置を講じたと想定されている。なお、複数回埋納の可能性については言及されておらず、土層断面にも明瞭な掘り返し痕跡は認められない[2]。本例は、木箱を用いたことが明瞭な点において寺福童例と大きく異なるが、木箱内で銅戈を支持するために粘土を置く点は、寺福童例の1～3号銅戈を粘土で固定した状況に通じるものがある。

２）福岡県北九州市重留遺跡第2地点（北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1999）

1号竪穴住居の南壁に沿って銅矛の埋納遺構が設けられている。土層観察から、重複して7回の埋納行為が想定されており、埋納土坑1～7と称される。切り合いが激しく、個々の遺構規模の確定は困難であるが、埋納土坑1が長軸123cm・幅43cm、埋納土坑5が長軸100cm前後・幅30cm前後、埋納土坑7が長軸100cm前後・幅22cm前後に復元される。

遺構内には、最終埋納坑である埋納土坑7の中に、広形銅矛1本が刃を45度に傾けて埋納されていた。埋土や銅矛表面の状況から、容器や巻き布などのない直接埋納が推定されているが、銅矛は床面から浮いた状態で出土している。遺構の上には白色粘土が厚さ2～7.5cmで置かれていた。

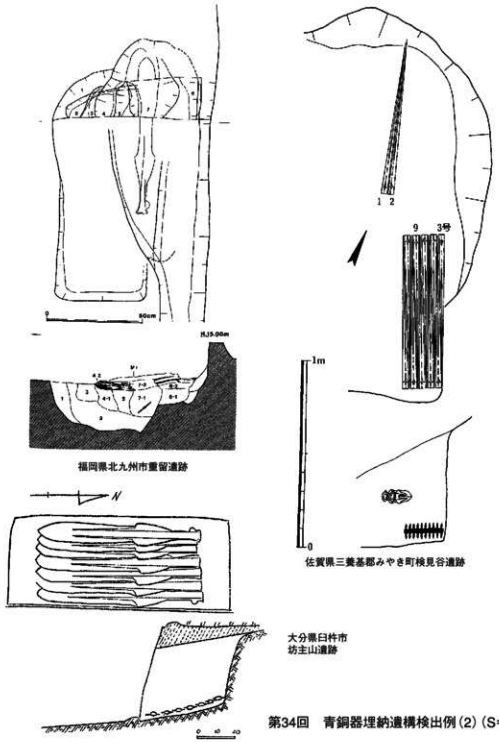


第33図　青銅器埋納遺構検出例（1）（S=1/20）

本例は、竪穴住居内の埋納施設である点と、銅矛が刃を傾けて埋納されている点が特異である[3]。銅矛が底面から浮いている点や、銅矛を支持する粘土等が認められない点は本行例に通じ、寺福童例とは異なる。

3）佐賀県鳥栖市本行遺跡（鳥栖市教育委員会1997）

長軸87cm・短軸30cm・検出面からの深さ10cmの長楕円形の土坑内に、中広形銅戈1本を埋納する。銅戈の周囲は黒色炭化物に近い土壌で、調査者は木箱による埋納を想定している。しかし、黒色土のみでは木箱想定の根拠としては弱く、木箱の有無は不明としておきたい。また、複数回埋納の形跡も



第34回　青銅器埋納遺構検出例（2）（S=1/20）

確認されていない。

銅矛は埋納遺構底面から浮いている。このことが、断面で見分けられない掘り返しによるのか、容器の存在によるのかは不明だが、寺福童例のように地山に直に接する状況とは異なる。

4）佐賀県神埼郡吉野ヶ里町吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区(佐賀県教育委員会1994)

SD1122の埋没途中に掘り込まれたと見られる長軸48cm・短軸24cm・検出面からの深さ20cmの平面楕円形の土坑内に、中広形銅戈1口が刃を水平に埋納されていた。容器等の痕跡は未確認である。本例は、刃を水平にして埋納する点が特異であるが、正報告未刊のため、今後解釈の変更がありうる。

なお、吉野ヶ里遺跡においては、大曲一の坪地区において銅鐸の埋納遺構が検出されている（佐賀県教育委員会2002）。埋没谷内に掘り込まれ、周囲の土と埋土が酷似して遺構の検出は困難を極めた

ようだが、直径0.3m・検出面からの深さ0.26mに復元されている。銅鐸は倒立状態で埋納されていた。

2.不時発見によるもので埋納状況がある程度わかるもの

不時発見による埋納青銅器のうち本論で扱う範囲内で、埋納遺構や埋納状態に関する情報がある程度提示されているものは、管見の限りでは18例ある。紙幅の都合上一覧表にして提示し、詳しい検討は（iii）で行なう。

地名		器種・数量	埋納坑規模（m）形状	埋納状態	備考	文献
熊本・山鹿市	今古閑	中細形銅矛4		「鋒そろえ」		田辺1959
福岡・春日市	小倉西方	中広形銅矛10	1×0.4×0.3 直方体	不明	埋土は黒灰色土	渡辺・小田・松岡1961
福岡・うきは市	弦掛	中広形銅矛3		3口重なる		高橋1925
佐賀・みやき町	検見谷	中広形銅矛12		「うちちがえ」10本，「鋒そろえ」2本[1]		北茂安町教委1986
福岡・うきは市	徳丸堂の前	中広形銅矛2		2口重なる		高橋1925
大分・宇佐市	鳥越切寄	中広形銅矛2		「うちちがえ」		安心院町教委1984
福岡・春日市	岡本辻	広形銅矛9		「うちちがえ」		中山1922
福岡・北九州市	上長野冷水	広形銅矛2		「鋒そろえ」		小田1976
福岡・那珂川町	安徳原田	広形銅矛12		「うちちがえ」		中山1930
大分・臼杵市	坊主山	広形銅矛7	1.2×0.8×0.8	「鋒そろえ」？	刃を水平に置く	賀川1953
福岡・筑前町	三並ヒエデ	中細形銅戈17		一部「うちちがえ」、一部「鋒そろえ」？[2]	土器に納める？（内側に錆シミ）	伊崎1999
福岡・筑紫野市	隈・西小田7	中細形銅戈23		「うちちがえ」？	近くに鉢と円筒形土器を埋納	筑紫野市教委1993
福岡・小郡市	大板井	中細形銅戈7			合口甕棺内？	福岡県高校教組1950
福岡・春日市	原町三丁目	中細・中広形銅戈48		「うちちがえ」[3]		西谷1969
福岡・小郡市	乙隈東畑	中広形銅戈2		銅戈の軸線上に一直線に並べる	刃を水平に置く	井上・柴田・渡辺1962
福岡・糸田町	古賀ノ峯	中広形銅戈6		「鋒そろえ」？		糸田町教委1998
福岡・飯塚市	綱分八幡宮	中広形銅戈3			土器に納める？	森貞次郎1942
福岡・糸田町	宮山	中広～広形銅戈9			素焼きの楕円形の壺に納める？	九州歴史資料館1980

第３表　北部九州（壱岐・対馬を除く）における不時発見埋納青銅器一覧(実態不明なものを除く)

(iii) 寺福童例と北部九州諸例との比較検討

(ii) で触れた北部九州の武器形青銅器埋納諸例との比較から、本埋納遺構の特色を抽出してみよう。

まず、容器の有無について、これまでに容器の使用が想定された例は数例ある。日永例と本行例では木箱が、筑前町三並ヒエデ・糸田町宮山・飯塚市綱分八幡宮境内・小郡市大板井・筑紫野市隈・西小田の各例では土器の使用が想定されている。このうち三並ヒエデ例は容器と想定される土器が現存しており、その内面に青銅錆の染み付きが見られる（伊崎1999）ことから、土器に入れて埋納していた蓋然性はより高い。木箱の痕跡は日永例において明瞭であり、現状で容器の使用を確認できるのは三並ヒエデ例及び日永例のみとして良い。

他の例を見ると、不時発見によるものは、容器の使用が想定されているものを含めて、今となっては容器の有無を確認する術がない。発掘調査によるものを見ても、日永例以外ではいずれも青銅器は遺構底面から浮いて出土している。重留例では遺構埋土等から直接土中埋納が推定されているが、青銅器が遺構底面直上に密着して出土するなど容器の使用が全く考えられない例は確認されていない。したがって寺福童例は、容器を伴わない直接土中埋納のあり方を考古学的に確認できた、北部九州における初例と言うことが出来る。

1～3号銅戈に見られるような青銅器を固定する粘土など、埋納青銅器を支持するような措置は、日永例のみに類例を求めることが出来る。寺福童例とともに筑後地方に位置する遺跡である点は興味深い。

次に銅戈の並べ方について検討する。寺福童例では（i）でのべたとおり、東側の7本が鋒を南西に、西側の2本が北東に向けて埋納されており、埋納遺構が後世の土坑に切られていることから、より多くの銅戈が埋納されていた可能性が考慮されている。

武器形青銅器の並べ方については、九州地方において10本前後以上の場合に「うちちがえ」を、2～5本程度の場合には「鋒そろえ」を多く採用する傾向にあることと、現段階では明確な地域性を見出し得ないことが戸塚洋輔氏によって指摘されている（戸塚2002）。これは、埋納時に「鋒そろえ」ではデッドスペースが増えることを考えれば合理的である。器種や時期によって並べ方の傾向が異なる可能性も考えたが、(ii) にあげた諸例からは、中細形銅戈がいずれも土器に納めて埋納されていたとみられることを除けば、器種・型式によって特定の埋納方法が卓越するといった状況は見受けられない。現状では、本数によるもの以外に並べ方の傾向性は見出せないと言ってよい。

寺福童例は9本ないしそれ以上の埋納であることから、「うちちがえ」が採用されていてもおかしくない事例である。ところが実際には「うちちがえ」ではなく、かといって純粋な「鋒そろえ」でもない並べ方で埋納されていた。

純粋な「鋒そろえ」や「うちちがえ」でなく、これらが混在した状態が想定されているものとしては、検見谷例・三並ヒエデ例がある。また、原町三丁目例についても「うちちがえ」と「鋒そろえ」の混在とする意見がある(伊崎1999)。しかしいずれも不時発見であるために、その出土状況の実態は必ずしも詳らかにされてきたとはいえない。

寺福童例では、こうした純粋な「鋒そろえ」「うちちがえ」の並べ方を採らない埋納形態を、発掘調査の手法によって検出することができた[7]。さらに、後世の土坑に切られた側にもう数本の銅戈の存在を想定するならば、その失われた銅戈は西側の2本と同様に鋒を北東に向けていたと考えるのが最も自然である。このように考えてよいとすれば、本来の埋納は鋒を南西に向けて「鋒そろえ」にした7本と、鋒を北東に向けて「鋒そろえ」にした2本以上を同一の列に並べて行われたことになる。こうした並べ方は「鋒そろえ」にした数本ごとの単位を「うちちがえ」に配置した、と表現すべきものであるが、不時発見例からの想定を含めても管見の限りでは他に類例がなく、実際にそうした並べ方が存在したか否かについては類例の増加を待つこととしたい。なお、寺福童例の検出状況は検見谷例・三並ヒエデ例・原町三丁目例に直接適用できるものではなく、純粋な「うちちがえ」「鋒そろえ」以外の並べ方にはいくつかのバリエーションがあったことが充分に予想される。

[文註]

（1）武末純一氏は、青銅器埋納遺構における青銅器の配置方法を、鋒部の方向をそろえて並べる「鋒そろえ」、一本ごとに鋒部の方向を交互に違える「うちちがえ」、鋒部をX字形に組み合わせる「X字型」に分類している(武末1982)。なお、X字型は現状では対馬にしか類例がない（戸塚2002）。

（2）複数回埋納の痕跡が認められない場合でも、先行する埋納遺構を完全に削平して最終埋納遺構が掘削された、または先行する埋納遺構が調査区外に存在する可能性が存在する以上、一回性の埋納と即断することはできない。よって本稿では、複数回埋納の痕跡が認められるか否かについてのみ言及し、一回性のものか否かには言

及しない。

（3）この傾きが意図的なものか不可抗力的なものかは不明である。

（4）本例では、うちちがえの一群と鋒そろえの一群がやや離れた状態に復元されている。ただし、うちちがえの一群が圧痕や埋納坑などを根拠に復元されているのに対して、鋒そろえの一群は聞き取りのみを根拠に復元されているうえ埋納坑が確認できないため、本来は12本全てが一括埋納されていた可能性も指摘されている。

（5）17本発見されたうちの13本は既に散逸しているが、残り4本の銅戈表面に付着した錆の状況から、「うちちがえ」「鋒そろえ」の混在が指摘されている。

（6）伊崎俊秋氏は、「うちちがえ」と「鋒そろえ」の混在を考えている(伊崎1999)

（7）島根県出雲神庭荒神谷遺跡では銅剣で「うちちがえ」と「鋒そろえ」が共存しているが、4列に並べられた銅剣のうち2列が「うちちがえ」、2列が「鋒そろえ」となるもので、それぞれの列は純粋な「うちちがえ」ないし「鋒そろえ」で並べられている。検見谷例は一見荒神谷例に近い例であるが、（4）で述べたとおり本来は12本全てが一括埋納されていた可能性も残されており、即断しがたい。

［参考文献］

中山平次郎1922「明治三十二年に於ける須玖岡本発掘物の出土状態(其一)」『考古学雑誌』12‐12

高橋健自1925『銅鉾銅剣の研究』

中山平次郎1930「新発見の銅鉾」『考古学』1‐5・6

森貞次郎1942「古期弥生式文化における立岩文化期の意義」『古代文化』13‐7

福岡県高等学校教職員組合1950『北九州古文化図鑑　第1輯』

賀川光夫1953「新たに発見された東九州の銅鉾銅戈」『考古学雑誌』39‐2

田辺哲夫1959「四本の銅鉾を出土した竪穴住居跡‐肥後植木町轟遺跡‐」『日本考古学協会第22回総会研究発表要旨』

渡辺正気・小田富士雄・松岡史1961「福岡県春日町新発見の銅矛」『九州考古学』13

井上俊男・柴田泰典・渡辺正気1962「福岡県三井郡小郡町大字乙隈発見の二口の銅戈」『九州考古学』14

佐藤堯1961「大分県北海部清水ヶ迫発見の平形銅剣」『九州考古学』11・12

西谷正1969「九州の銅戈」『月刊文化財』1969‐9

小田富士雄1976「青銅利器と鏡鑑」『北九州の埋蔵文化財』

七田忠昭1976「文様ある銅矛について・佐賀県目達原銅矛の紹介を兼ねて‐」『九州考古学』52

九州歴史資料館1980『青銅の武器』

武末純一1982「埋納銅矛論」『古文化談叢』9

安心院町教育委員会1984『宮ノ原遺跡』

北茂安町教育委員会1986『検見谷遺跡』北茂安町文化財調査報告書第2集

筑紫野市教育委員会1993『隈・西小田遺跡群』筑紫野市埋蔵文化財発掘調査報告書第38集

佐々木隆彦1997「日永遺跡出土の銅矛・銅戈」『九州歴史資料館研究論集』22

鳥栖市教育委員会1997『本行遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第51集

糸田町教育委員会1998『宮山遺跡（付）古賀ノ峯遺跡出土銅戈』糸田町文化財調査報告書第3集

伊崎俊秋1999「福岡県夜須町出土の銅戈」『甘木歴史資料館報』1

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室1999『重留遺跡第2地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第230集

戸塚洋輔2002「（3）九州の埋納青銅器」『吉野ヶ里銅鐸』佐賀県文化財調査報告書第152集

山崎頼人2006「［2］銅戈取り上げ・遺構内部調査」『寺福童遺跡4　発掘調査概報』小郡市文化財調査報告書第206集

片岡宏二2006「V.寺福童遺跡銅戈埋納をめぐる諸問題」『寺福童遺跡4　発掘調査概報』小郡市文化財調査報告書第206集

寺福童遺跡4　全景（第2遺構面）

図版2

① Ⅱ区第１遺構面　完掘状況

② 1号井戸状遺構　土層断面（西から）

③ 2号土坑　土層断面（東から）

④ 2号土坑　完掘状況（北から）

⑤ 3号土坑　土層断面（南西から）

図版3

① 3号土坑　完掘状況（北東から）

② 13号土坑　完掘状況（東から）

③ 1号竪穴住居　焼土塊断割断面

④ 1号竪穴住居　貼床検出状況（北から）

⑤ 1号竪穴住居　貼床掘削状況（西から）

⑥ 2号竪穴住居　貼床検出状況（北西から）

⑦ 6・9号竪穴住居　貼床検出状況（西から）

⑧ 6・9号竪穴住居　貼床掘削状況（北東から）

① 7・8号竪穴住居　貼床検出状況（北東から）

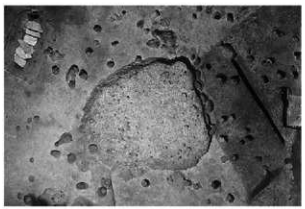
② 7・8号竪穴住居　貼床掘削状況（北東から）

③ 10号竪穴住居　貼床検出状況（南から）

④ 10号竪穴住居　焼土検出状況（南東から）

⑤ 10号竪穴住居　土器出土状況（南東から）

⑥ 10号竪穴住居　貼床掘削状況（南から）



⑦ 5号土坑　完掘状況（西上空から）

⑧ 11号土坑　完掘状況（南東から）

① 1号溝状遺構　完掘状況（北から）

② 石蓋土壙墓　覆土断面（南西から）

③ 石蓋土壙墓　検出状況（南西から）

④ 石蓋土壙墓　土層断面（1）

⑤ 石蓋土壙墓　土層断面（2）

⑥ 石蓋土壙墓　墓壙完掘状況（西から）

⑦ 木棺墓　土層断面（南東から）

⑧ 木棺墓　整地層検出状況（北東から）

① 木棺墓　整地層断面（南東から）

② 木棺墓　墓壙完掘状況（北東から）

③ 落とし穴状遺構　土層断面（西から）

④ 落とし穴状遺構　完掘状況（北から）

⑤ 落とし穴状遺構　断割断面（西から）

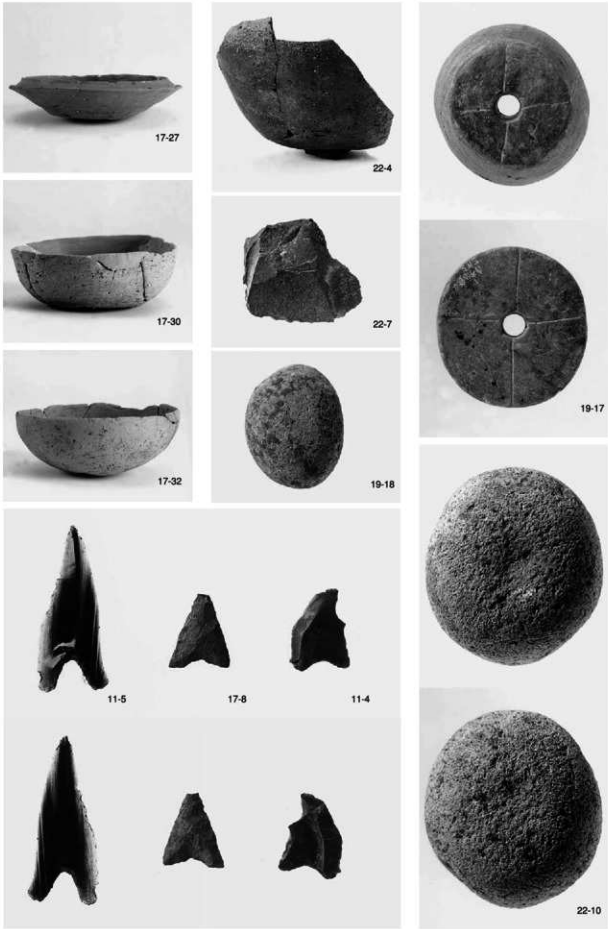
⑥ Ⅱ区黒色土（第１遺構面）堆積状況（１）

⑦ Ⅱ区黒色土（第１遺構面）堆積状況（２）

⑧ Ⅱ区黒色土（第１遺構面）堆積状況（３）

出土遺物（1）

図版8



出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	てらふくどういせき　4
書名	寺福童遺跡　4
副書名	福岡県小郡市寺福童所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第221集
編集者名	上田　恵
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財センター
所在地	〒838-0106　福岡県小郡市三沢5147-3　　TEL　0942-75-7555
発行年月日	平成19（2007）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
寺福童（てらふくどう） 遺跡（いせき）4	福岡県小郡市（ふくおかけんおごおりし） 寺福童（てらふくどう）996－2	40216		33°22′ 57～59″	130°33′ 10～12″	20040608 ～ 20041117	906㎡	道路・水道 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺福童 遺跡4	集落 その他	弥生中～後期 古墳 奈良 中世 近世	銅戈埋納遺構 竪穴住居 土坑　溝 土坑 土坑 溝	青銅器 土師器・須恵器・石器 土師器 陶磁器・石製品 陶磁器	中広形銅戈9口を伴う 青銅器埋納遺構を検出

寺福童遺跡 4
—福岡県小郡市寺福童所在遺跡の調査—

小郡市文化財調査報告書
第221集

平成19年3月31日

発行 小郡市教育委員会
福岡県小郡市小郡255－1

印刷 株式会社 マリックス
福岡県福岡市南区清水2-11-1